ポケモンになってしまった俺物語

ネメシス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモンになってしまった俺物語

【Ｎコード】
Ｎ０３８６Ｑ

【作者名】
ネメシス

【あらすじ】
朝起きたらなぜか全米で人気を集めたあのポケモンの世界に！？
しかも俺はそのポケモンの中でも最も人気のあるあのポケモンに！？
俺のこれからは一体どうなるんだ！！！！！

一話（前書き）

どうもネメシスです。

性懲りもなく長編第二作。

一作目もまだ完成もしていないのに第二作目ですよ。

基本、あっちがメインで進めていきたいと思いますが、どちらも応援していただけたら幸いです。

一話

俺は森の中で目が覚めた。
昨晩は確かに自分のベッドで寝たはずなのに、なぜか森の中で目が覚めたことに混乱するも、とりあえず冷静になるために素数をかぞえた。

（……2，3，5，7，9，11……あれ、9って素数だっけ？）

とりあえずわかったこと、素数を数えても冷静になんてなれるわけがない。
てか誰だよ、素数を数えたら冷静になれるって言ったやつ、これだったら手のひらに人って書いて飲み込むの方がまだ良くね？

（……人、パク…人、パク…人、パク……人が入になったじゃねぇか！！！てか、これは緊張を紛らわせる時のやつだろ！！！）

とかなんとか考えている時点で何気に冷静さを取り戻していることに気付く。
そして、今更ながらに周囲の様子がおかしいことに気付いた。

（なんか……木がでかすぎね？）

周囲の木が、なにやら以前見たワ〇ピースのアッパー〇ードくらいにでかい。
ふと足元を見てみると、今度は地面が近く、そして同時に見えた自分の足が……なぜか黄色かった。

（うぇ！？ちょ、な、なにこれ！？）

慌てて自分の体を調べてみる。
すると

（え、ちょ、ちょっと？こ、これって……）

短い腕、短い脚、おおよそ二頭身くらいの小さく黄色い体、尖った耳、そして極めつけがまるで雷を表しているかのようなギザギザの尻尾。

これは俺にとって、いや俺だけじゃないだろう、この姿を見たらおそらく誰でも即答できるくらいかなり見たことのある格好だ。
全米でかなり人気になった作品で、子供だけでなく大人でも知っているあの作品。
そしてその作品の中で、最も人気があった一匹、体は小さくとも他を凌駕する力を発揮する電気ネズミ。

そう、その名は……

「ピ、ピカチュウウウウウウウウウ！？！？！？」

俺はその日、ポケモンとして、ピカチュウとして新しい一歩を踏み出した。

昨日はいきなりのことに頭がショートしそうになり、とりあえず考えるのをやめて不貞寝を決め込んだ。

起きてみると明るさ的に朝の8時くらいか？
あぁ、野生のポッポがポッポポッポ鳴いてるわ。
……昨日不貞寝した時、まだ明るかったのを考えると、最低でも10時間以上寝てたのか？
流石に、いつまでも不貞寝しているわけにもいかないので、とりあえず食事をとることにする。

（……って、自分の家じゃないから食料も自分で見つけなくちゃいけないのか）

てか、ポケモンって何食うんだろうな、ポケモン同士食い合うってわけじゃないだろうし、そんなんだったらマジで怖い。
常識的に考えて木の実とかか？
そう考えて、木の実を探すために歩き出した。

それからしばらく木の実を探していたが、なかなかに見つからない。

流石にそう簡単に見つかるほど自然は優しくないか。
と、次は別の方向を探そうかと歩き出したとき、何やら声が聞こえてきた。

（これは……人の声か？）

気になり声の方に向かっていくと、人の声だけでなくそれ以外の荒々しい音も聞こえてくる。
目の前の茂みを抜けると、ポケモン同士が戦っているところだった。
片方のポケモンの背後にはトレーナーらしき人がいて、自身のポケモンに指示を出しているようだ。
トレーナーの方はコラッタ、そして野生と思われる方はポッポだ。

トレーナーの容姿、ポケモン、その技、そして戸惑いながら指示を出しているところを見る限りどうやらそのトレーナーはまだ駆け出しの新米のようだ。
ポッポがつつくをするとコラッタがギリギリのところで躱し、隙をついて体当たりを繰り出すという行動を繰り返すだけ。
かなり単調なものではあるが、それでも俺は初めてポケモンバトルを生で見ることができて感動している。
そしてついにコラッタのたいあたりがポッポに命中すると、急所にでもあたったのかかなりふらふらしていて、ついには地面に下りてしまった。

トレーナーは腰から丸い赤と白とで半々に色付けされたボール、モンスターボールを取り出すとそれをポッポに向けて投げる。

ポッポは躱せるほど力が残っていなかったのか、避けようとはしていたみたいだがそれも無駄に終わりボールが命中してしまった。

すると、ポッポは光に包まれボールの中へと入っていく。
そのボールはカタカタと小刻みに何度も何度も動いている、まるでポッポの最後の抵抗と
でもいうかのように何度も何度も。

そして、ついに動かなくなってしまったボールをトレーナーは喜んで拾った。
ボールの中からポッポを出すと、さっきまで戦っていた相手とは思えないほどそのトレーナーになついていた。
その時、俺は悪寒がした。
さっきまで感動に震えていた体が、今度は恐怖によって震えている。

（なんだ、あれは…まるで洗脳したかのようにトレーナーに対して敵意が消えている）

今までゲームをやり、アニメを見て、漫画を見て、それが普通だと思っていた。
しかし、今現在、自分がこの場でその現場を目撃して、なぜ今まで普通だと思っていたのか不思議でしょうがない。
ポッポは確かに敵意を持ってトレーナーと対峙していた。
それが、負けてボールに収められたからと言って気は収まるものだろうか？

もしかしたら、モンスターボールで捕獲するということは、ボール内でポケモンの脳に対し何らかの作用を働かせ、意思を捻じ曲げて自分に従わせるようにすることなのではないだろうか、そう俺は思ってしまった。

だが、テレビを見る限りだと自分の方から仲間になったポケモンもいたし、そのポケモンはボールから出した後も何の変化もなかった。つまり、脳に影響を与えるのではなく、ただボール内では鎮静効果にも似た働きをしていてポケモンを落ち着かせるということも考えようによっては考えられるということだろうか？

……いや、そんな保障どこにもない。

これが一体どういうことなのか、専門家でもなんでもない俺には理解できないが、一つだけ確かなことがある。

（……捕獲はされない方がいいな）

洗脳なのかどうなのか、それは試してみないことにはわからないことだし、試してみたいとも思わない。

だが、ここがポケモンの世界ならば、トレーナーがいるのならば俺にも捕獲される危険性があるし、何よりここにはトレーナー以外にもロケット団やポケモンハンターなどという無理やりポケモンを捕まえようとするやつらだって存在している。

なんで俺がポケモンの世界に来たかなんてわからないし、帰れる保証だってない。

これから先このポケモンの世界で一匹のポケモンとして生きていかなくちゃいけないのならば、その危険性から決して逃れることはで

きないだろう。

だったら、俺は

（強く、強くなろう。負けないためにも、捕獲されないためにも、自分が自分でいるためにも）

そう、決心した。

二話（前書き）

はい、一時作業休み前の最後のうｐです。

しばらくはうｐできなくなりますが、皆様、私ことネメシスをどうか忘れないでください！

私はきっと帰ってきます！この世界に！

……と、まぁこんなことやってないで本編へＧＯですねｗｗｗ

二話

強くなろうと決意したものの、そう一日や二日で強くなんてなれるものじゃない。

アニメのサトシ君のピカチュウは……あれは例外でしょ？
初期の力がぜってぇ初心者用ポケモンの域を逸脱してるもん。
漫画のレッドが持っているピカチュウは……うん、あれもある意味サトシ君のピカチュウ以上のチートポケモンかもね。
なに、１００万ボルトって？ピカチュウ一匹の力じゃないにしてもあれは伝説レベルの力だろ？一ピカチュウが使っていいような技じゃないって：ｊｋ。
まぁ、それでも自然現象で起きる雷と比べるとかなり低いボルト数らしいがな。

とりあえず、自分の今の力を知らないことには何をどうしたらいいかもわからない。
今現在、俺がどんな技を使えるのかを調べてみる必要がある。

と、いうわけで、まずピカチュウと言ったら電気タイプ。
電気タイプの初歩って言ったら電気ショックでしょう。

そこで俺は、手近にあった木目がけて電気ショックを放った。

……放った

……放てなかった。

（てか、どうやって電気ショックなんて出すんだ？）

まずそこからわからない。
そもそも俺は今まで人間で、突然ピカチュウになっちまったんだ。
まだこの体のこと何も知らないのに電気技が使えるはずはないか。

いろんな二次創作で、転生憑依したオリ主たちが何の不都合もなく普通にその体が持っている技を使っているからもしかしたらって思っちまったが、それはさすがに無いようだ。
だって俺、ピカチュウに憑依する前の記憶ないし。
頭で覚えてなくても体で覚えてるものじゃないのかって？
俺もそう思ってたんだけど、それがそうでもないらしい。
理由？そんなの今現在俺が使えないから以外にないだろう？
他の作品じゃオリ主がいろいろ考えて考察とかあるかもしれないけど、はっきり言って俺にそんなの期待するのは損ってものだぞ？
残念ながら俺はそこまで頭の回転がいい方じゃないし、どっちかっていうと頭で考えるより感覚で覚えてきた派だ！
ゲームだって説明書なんて読まないね！実践して覚える派だもんね！

……なんか脱線したが、まぁいい本題に戻ろう。

最初にどのようにして電気を使うことができるか、いやそれ以前に自分の中の電気の力を感じ取ることからか。
こんな時に役に立つのがアニメ知識というか漫画知識というか。
以前見たポケモン図鑑の情報を記憶の中から探り出す。

（えぇと、確かピカチュウは両方の頬に電気袋というものがあり、そこから電気を放出したりするんだったっけ？）

それを思い出し、両方の頬を手でプニプニと弄る。
……何気に気持ちいいな。
そういえばアニメで「ピカチュウは頬に電気袋がありそれをいつも使うから頬が疲れやすいので、時々マッサージをしてやるといい」とかなんとか言っていた気がする。
それを思い出しながら頬を弄っていると、パチパチと頬を電気が僅かに流れるような感覚を覚えた。

（ん、これか？）

これが自分の体にある電気を感じたというものか。
一旦マッサージを止め、その感覚を思い出しながら頬に意識を向けていく。
すると、さっきまではわからなかったが、そこに先ほどの感じと同じものを感じる。

（……これなら、いけるか？）

その電気袋から電気を外に放出するイメージを持ち、先ほどと同じように木に向けて電気ショックを放った。

すると、先ほどは何も起こらなかったというのに、今度は電撃が木に向かって飛んで行き、目標よりかなり下の方ではあったが確かに

あたった。

（なるほど、これが電気を使うという感覚か）

自分の体を電気がはしるわけだから、何かしら体に刺激のようなものがあるのではと思っていたが、特にそのようなものはなく電撃を飛ばすことができた。

電撃の当たったところを見てみると、その部分が少し焦げているのがわかった。
まだ力になれていないからかもしれないが、あまりにも予想していたものより威力が低かったことに少なからず残念に思ってしまう。

が、それは比べる対象が悪かったとしか言えないだろう。
俺が比べる対象にしていたのは、先ほど考えたサトシやレッドのピカチュウだったからだ。
流石にやっと力を使うことができるようになっただけの俺が、あのピカチュウ達と比べること自体間違いだったか。

（電気ショックは、とりあえずできたが命中力も威力も低い。これじゃ１０万ボルトも雷も覚えるのに苦労しそうだ。これは要練習だな）

電気技が俺の技の要になるだけに、練習の大半は力の制御にあてな

くては、そう考えつつ自分がさっき電撃を当てたところに山火事にならないようにと土を念入りにこすり付けておいた。

さて、次に俺自身の身体能力がどれほどのものかだな。
電気技だけで勝てるほどこの世界は甘くはない。
いろんな技を駆使し相手を翻弄し、決めに電気技を持っていくというのが妥当だろう。
そしてピカチュウで電気以外にも特徴的なもの、それは素早さだ。
アニメとかでもよくそのスピードをもって相手を翻弄しているところが見られた。

（……ってなわけで、ちょっくら走って来るか）

そして、走り終えて分かったこと。

まず、人間の時に学校で体育の時間でやっていた５０ｍ走を行った。
大体の距離のところに目印をつけ、そこを目指して全力疾走

……したのだが、これもおよそのタイムなのだが、なんと

……１０秒前後

（……いや、おかしいだろ？なんで５０ｍを１０秒前後！？人間より遅いってどんだけ！？１００ｍを走ってんじゃないんだよ！？いや、かりに１００ｍだとしてもそれは人間のレベルでそれなりにすごいってレベルだよね！？
仮にも俺ポケモンだよ！？素早さで定評のあるピカチュウだよ！？流石にこれはないだろ、こんなスピードじゃそこらにいる野生ポケモンに出会っただけでフルボッコだよ！？いくら電気使えるって言ったって相手の攻撃喰らいっぱなしだったらピカチュウじゃ即ノックダウン確実だよ！）

トレーナー相手にどうこう以前に野生でも生きていけるかわからないという状況に目の前が真っ暗になりそうになった。
流石にこれは何とかしなくては、そう思って考えてみると、ふと思い出したことがある。

（そういえば、ピカチュウって二本足でも歩けるけど、基本走ると

きって４本足だったっけ）

そう、俺は体はピカチュウでも中身は人間、人間の時の癖で２本足で走っていたのだ。
これじゃいくら早さに定評のあるピカチュウでも早く走ることはできないだろう。
だってピカチュウの足、短いんだよ？いくら頑張って走ったってたかが知れるというものだ。

本来４本足で走るポケモンが二本足で走るなんてなんていう暴挙だよ、これじゃ速く走ることなんてできなくて当然だ。
まぁ、ロケット団のニャースという前例がいるにいるが、別にニャースみたいにわざわざ二本足じゃなくてはいけない理由なんて俺にはない。
……てか、そう考えてみるとニャースってかなりすごい？

と、いうわけで今度は４本足で５０ｍを走ってみる。
すると、４本足という今までとは違う走り方で違和感とかはあるにはあるのだが、それでもおよそ５秒ほどで走ることができた。
体の記憶がないとはいっても、もともとの体のつくりが４本足で走るようにできているのだ、違和感があろうとも２本足の時より早く走れるのは当たり前か。
４本足で走ることに慣れていき、この違和感を取り払うことができればさらに早く走ることができるようになるだろう。

そんなこともあり、俺のこれからしばらくのトレーニングメニューは、自らの電気能力を制御することと、このピカチュウという体での動作に慣れることに決まった。

二話（後書き）

と、まぁこんな感じになりました。

体の記憶とか心の記憶を受け継いでいるとか、それなんてご都合主義？と思ってしまった私ネメシスです。

さすがにそれほど人生（ポケモン生？）甘くないと私は思いまして、こういう感じにしてしまいました。

このピカチュウ、かなり弱い設定から始めました、最初はコラッタ、ポッポ相手にも苦戦します。

いくら相性がいいからと言って当たらなかったら意味はないというやつですね。

なんだかんだと、いろいろと試行錯誤しながらピカチュウは強くなっていきます。

いつかサトシ君ピカチュウともバトルさせてみたいなぁとも思っています。

さて、次回は少し時間が飛びます。

……リアルでも作中でもね。

それではまた次回、お会いしましょう。

三話（前書き）

テストが一息ついたので息抜きに投稿をば。

しかしまだまだ終わらぬテスト地獄……。

だれか癒しを！私の心に癒しをください！！！

と、そんなことは置いといて、本編をどうぞ！

三話

どうも皆さん久しぶりです、ピカチュウになってしまった人間こと俺です。

バシバシバシバシバシバシバシバシ！

いやぁ、あれから1年、ほんといろいろありました。

バシバシバシバシバシバシバシバシ！

訓練中に野生のオニスズメの集団に襲われて必死で逃げたり、食料を調達している時にトレーナーに遭遇しゲットされそうになりながらも我武者羅に逃げたり。

バシバシバシバシバシバシバシバシ！

訓練中に危うく山火事を起こしそうになって必死で土をかけたり、散歩中に何の偶然かまたもやオニスズメと遭遇し一匹だと思って何とかやっつけて悦に入っていたらどこからか現れたオニスズメの群れにまたもや追い掛け回されたり。
まったく、少しくらい勝った余韻を味うことくらい許してくれてもいいだろう！！！

バシバシバシバシバシバシバシバシ！

と、まぁ、ほんと辛いことだらけの毎日ですが、それでも俺は今も元気に頑張ってます！

バシバシバシバシバシバシバシバシ！

……さっきからバシバシ何やってるのかって？
これはあれだよ、特訓だよ？
ＴＶでピカチュウがアイアンテールを覚えるために尻尾を鍛えていただろ？
俺もそれを習って尻尾を鍛えてるんだよ。

電気タイプの弱点はやっぱり岩とかだからさ、そんな相手に遭遇したら今の状態だとまず間違いなく負ける。
なんたって、今現在俺ができることは電気ショックで痺れさせるか、相手をたきつけるか、なけなしの爪で引っ掻くか、砂をかけて目くらましを狙うくらいなものだ。
たたきつけるはまぁ、ダメージは与えることができるかもだが、はっきり言って岩タイプにとってはダメージは微々たるものしか与えられない。
結局倒すことはできないから話し合いで解決するか、最悪逃げるしかない。

以前、この森に棲んでいるコラッタやポッポ達から聞いた話では、ここの森はトキワの森らしいから、ここら辺では遭遇する危険性は少ないかもしれないが、それでも絶対とは言い切れない。
ここはゲームじゃなく、現実なのだ。
ある程度生息地域は大差ないだろうが、ポケモンだって意思があり自分の意思で行動する。
その生息地域から出るポケモンだっているかもしれない。
いつそんな相手に遭遇するかわからないのだ、だからアイアンテールはなるべく早いうちに覚えておかなくてはいざという時に大変だろう？

そんなわけで、俺はアニメのピカチュウのように石を蔦で尻尾に括り付けて上げ下げしたり、尻尾をうまく使いこなせるように尻尾を的の木に打ち付けたりしている。

しかし、いやぁ、尻尾を使いこなすってホント難しいなぁ。
普段使う手や足と違い、ほとんど意識して使ってなかったから、改めて意識して使ってみるとなかなかに思い通りには動いてくれない。
今も木を的にして打ち付けているのだが、なかなか狙ったところには当たらない。
電撃の時もそうだったが、もしかするとそれ以上に難航するかもしれないな。

石をぶら下げて上げ下げするのもかなりしんどい。
最初のころなんてなかなか上がらず踏ん張りに踏ん張って、あろうことか力の入れどころを間違いウ××が出てしまい、急いで物陰で処理をしたものだ。
あの時はほんと「やっちまった！」って感じだったからなぁ。
せめてもの救いはその場に俺以外に誰もいなかったってところか。
誰かに見られていたら俺死ねるね、羞恥心で絶対死ねると思うね。

まぁ、今では何とか力の入れどころを覚えて行うことができるようになったが、ほんとにあれは黒歴史だ、早く忘れたいものだ。
……このように思い出している時点で忘れるのが遠のくのだろうな。

さて、ただ訓練をするだけではいけない、この世界の情報も少しずつ集めなくては。
そう思い、依然知り合ったポッポのもとを訪れた。
ひこうタイプということもあり、年がら年中飛び回り、いろんなところに行き、いろんなものを見ているのだ。

情報を集めるには最適といえるだろう。

そして、聞いた情報をまとめると以下の通りだ。

1、　木の実は森の西に多くある

……今度取りに行ってみよう。

2、最近スピアー達が活発化している

おそらく、コクーンからスピアーに進化する時期でスピアー達の神経が過敏になってきているのだろう。
繁殖期や成長期というものは他のポケモンもそうだが、スピアーは特に気が高ぶり危険度を増す。
スピアーの巣の在処は確か森の東の方角だったか？
……なるべく近づかないようにしよう。

3、ニャース型の気球がトキワの森の上空を越えてで森の前にある村の方角へ向かっていった

……もしかしなくてもロケット団ですか？
その中に誰が乗っていたのか聞いてみると、Ｒと描かれたへんてこな服を着た男女の二人組と、不自然に二本足で立っており尚且つ人間の言葉を話すニャースが乗っていたと。
ニャースが二本足で立っているのもそうだが、人間の言葉を話すなんておかしい話だよなぁと、ほかのポッポ達が笑ってはいたが俺からしたらあまり笑えない。
つまり、全部が全部ではないにしろこの世界はアニメの世界を基にしていると考えていいかもしれない。

そして、その世界のロケット団員であるムサシ、コジロウ、ニャースの三人組は目をつけたものをあきらめない執念深さがある。
現に、目をつけられたサトシのピカチュウを追ってカントウ中をストーカーし、果ては地方を超えても船にしがみついてまで追ってくるという執念深さ。
何度電撃でふっとばされても次の回にはケロッとしてまた襲撃してくるタフネスさも注目でき、団からの援助資金が尽きたとなればアルバイトをしてまで金をためて追いかけ続けるという、野球ファン顔負けの追っかけぶり。
しかも、毎回毎回高度な機械兵器を制作して投入してくるという、もうお前らロケット団の技術部にでも配属された方がいいんじゃねぇのとか、その資金ほんとどっから持ってきたんだとかいろいろと突っ込みを入れたくなるほどだ。

いつもいつも失敗ばかりしている彼らだが、その執念と技術力は本当に目を見張るものがある。

サトシのピカチュウを追ってなければ、恐らく彼らは今頃かなり昇進してたんじゃね?と以前俺の友人が言っていた。
そんな奴らに目をつけられたらマジでたまったものではない。
サトシは主人公補正とか、仲間がいたりとかその他もろもろの要因で毎度毎度ロケット団の襲撃を潜り抜けてきてはいるが、普通他の奴らじゃ絶対無理だ。
出来るだけサトシやロケット団とかかわらない方向で行こうか。
じゃないと、今の俺なんて一発でゲットされちまうからな。

4、少し前、初心者のようだがかなり腕の立つ3人のトレーナーがこの森を通って行った

ここがアニメの世界を基準にしているとなると、その3人のトレーナーというのは、ロケット団が来たという時期を考えてもおそらくシゲルたちサトシ以外の3人の事だろう。
と、いうことはもう少ししたらここにサトシやロケット団たちが来るということか。
シゲル達の後に出たことと、いろいろと騒動に巻き込まれて遅れたことを考えても大体あと数日後くらいか。
……見つからないようにひっそり隠れてるか、もしくはそろそろこの森を出て先に進むことを考えるか。
ま、それはもう少し特訓を重ねてからだな。

と、そんな感じのがポッポの話だった。
いろいろと知ることができ、かなり有意義な時間だったな。
特にアニメを基準としていること、サトシやロケット団のことを聞けたことがかなり大きい。
もしこの世界がゲームとかの世界を基準にしてるのだったらいろいろと不都合が生じる可能性だってある。
例えば、技は４つまでしか覚えられないとか、ほかの技を覚えるのに技マシンまたは秘伝マシンを使うかをしなければいけないとかだ。
流石に、４つまでしか覚えられないというのはいろいろと戦闘の幅が狭まってしまうからな。
ま、そのことに関してはここがゲームじゃなく現実だと認識した時からあまり心配はしていなかったがな。
とりあえずいろいろ聞かせてくれたお礼に木の実を一つプレゼントしておいた。

まぁ、なんにしても、今の俺にできることなんで限られているわけだが。
ロケット団にしろサトシにしろその他のトレーナーにしろ。
結局強くならなくちゃ撃退することも、逃げることもできやしない。

と、いうわけで

もっと強くなるために今日も特訓特訓っと

三話（後書き）

と、いう感じで第三話です。

技に関してはとりあえずこれはできるだろうと思うものも上げてみました。

まぁ、アニメを基準としているということもありますから、ゲームではない回避とか攻撃とかがあってもいいですよね、サトシ君たちもしてますし。

にしても、ほんとロケット団のムサシ、コジロウ、ニャースはすごいですよね。

あの機械製作技術も、商売の腕も、タフネスさも。

ポケモンの技を人間が受けると後遺症があるとか何とか漫画であったのですが、そこはギャグということで流せというやつですかね。

さて、今うpしましたが、実際まだテストは終わっていません。

ということもあり、また間が空いてしまうと思いますが、どうかご容赦を。

それではみなさん、また次回で！

四話（前書き）

ポケモン第四話です。

いやぁ、前からかなりあいてしまってすみません（汗

……てか、ポケモンのほう、見てくれる人余りいないかもしれないけど……（泣

と、とりあえず、投稿です！

せめて少数の方でも、見ていただけたら幸いです！

四話

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……

（ん？雷か？）

俺は日課となった木の実採集をしている時、ゴロゴロと雷鳴が聞こえてきた。
ふと空を見ると一面見渡す限りの曇天、濃い灰色に彩られていた。
そのせいか昼時というのにもうすでに周囲が暗い。
どうやら今日は一雨来るようだ、俺は木の実収集をする手を急がせた。

てか、流石ポケモン世界というかなんというか。
たくさんのポケモンがいるくせにその主な食料となる木の実が全くと言っていいほどなくなる気配がない。
俺が収集する木もほかのポケモンたちが結構いるにもかかわらず一向になくなっていない。
そのことを疑問に思い以前知り合いのポッポに聞いてみたところ、木の実の種類によるが大抵は数日、数週間でまた実るそうだ。
ちなみにこの木になる実は大体2，3日経つと普通にまた実るらしい。
それを聞いた時は「ゲームの使用か？」と疑問に思ってしまったが、実際に考えてみると数百、数千、数万を超える膨大な数のポケモンたちに、さらにはカビゴンのような大食漢なポケモンたちまで野生に生息しているのだから、そうでもないと野生で生きてなんていられないだろう、そう納得しておいた。

あぁ、そうそう、話は変わるが以前に俺が思い悩んでいた人にゲットされると洗脳されるのではないかということなのだが、それに対しては8割がた解消した。
これも以前知り合ったピジョンに聞いたことなのだ。

『なぜ人にゲットされたポケモンがあそこまで従順になってしまうのだ?』

そう聞いてみたところによると彼は

『確かに彼ら人間たちに従うポケモンもいるが、それはそのものを気に入り、認めたからこそだ。俺たちは感情のある生き物だ、機械のように何でもかんでも意のままに従うことはない。例えゲットされてもその者を気に入らなければ、認めていなければ俺たちは決して従うことはないし、逆にその者に対し牙を向くこともある』

それを聞いて俺は思い出した。
アニメであっても、漫画であっても、ゲットされたすべてのポケモンたちが皆従順に従っているわけではないということを。

例えばサトシのピカチュウ。
ピカチュウは確かに今ではサトシと切れることのない友情で結ばれた仲だが、当初はピカチュウは何度もサトシに対して電撃を放ち威嚇し、更には（これは今でもだが）ボールに入れという指示に断固

として拒否していた。

例えばサトシのリザードン。
確かに元は人のポケモンだったからリザードンになり性格が変わりサトシのいうことを聞かなくなったから、ゲームの設定が成り立っているのではないかと思ったが、バッチを集め終えリーグに挑戦した段階であるにもかかわらずリザードンはいざという時でサトシの指示を無視した。
この時点でゲームの設定「他人からもらったレベルの高いポケモンはバッチが無いと従わせることができない」ということと矛盾している。

ピカチュウにしても、リザードンにしても、あの態度を見るからに洗脳されているという風には見えなかった、そうまったくと言っていいほど。
両者とも、トレーナーであるサトシが気に入らない、認められない、という気持ちで指示を無視したりもしたし、攻撃を加えたりもした。
そして、旅を通してサトシと共に歩み、その中でサトシを気に入り、認めたからこその今の関係があるのだろう。

今までポケモンという作品が好きでアニメも漫画も何度も見てきたというのに、そのことを実際にポケモンに言われるまで思い出すことができなかったとは、自称ポケモン大好きっ子が聞いてあきれるというものだ。

……ん？じゃぁ、残りの２割は何なのかって？
いや、確かにある程度は解消し安心はしたけど、まだ懸念事項がないわけではないのだ。
普通のトレーナーはいいかもしれないが、どこかの組織が開発したボールやら何やら、十分怪しいものも一緒に作中に出てきたからなぁ、その２割はそれらの非人道的（非ポケモン道的？）な奴らのことを指してるわけだ。
まぁ、とにもかくにも、ゲットされないっていう方針は今のところ変えるつもりはないけどな。

話を戻して、木の実収集を終えた帰りのことだ。
いつものごとく収取場である木で昼食をとりつつほかのポケモンたちとの会話を楽しんでしまい、かなり時間が過ぎてしまった。
時計がないから大体でしかないが、３時過ぎたくらいだろうか？
昼食の時間を差し引いても大体２時間ほど会話を続けていた計算になる。
……どことなく井戸端会議をしてるおばちゃんを思い浮かべてしまい少々気落ちした。

ゴロゴロゴロ……ガシャァァァン！

（ん？少し遠いけど、雷が落ちたのか？）

ふと周囲を見渡してみると先ほどより薄暗さが増し、ポタポタと雨が降り始めていた。
空では先ほど以上に雷鳴が響き渡っていて、いつ落ちてきてもおかしくない。
しかも、電気は電気を呼ぶ。
つまり電気ポケモンであるピカチュウである俺は、こういう時雷が落ちる可能性が高いのだ。

（……ちょっと、急いだ方がいいか）

俺は早足で寝床へと向かった。
両手に木の実を持っているのであまり速く走れないのが悔やまれる。

ビリビリ…ビリビリビリ……

すると、今度はどこかで雷鳴よりかなり小さい電気がはしる音が聞こえる。
少し気になりその音の発生源を探してみる。
……探すまでもなかった、なぜならすぐに目の前で電気が迸っていたからだ。

（ちょ！？なんで俺の頬から電気流れてんだ！？俺はやってないぞ！　……っは！もしかして……雷に誘われて俺の頬の電気袋がら電気が漏れてきてるのか！？）

前以上に自身の力をコントロールできるようになったとはいってもやはりまだまだほかの電気タイプから見たらお粗末なところがあるのも事実。
実際、以前この森で出会ったピカチュウに会った瞬間だめだしされたのだ。

『ぷっ！ピカチュウにもなって電気袋の電気も制御できないの！？そんなのピチューだってできるのにねぇ！はっはっはっはっは！！！！！』

そう、ひとしきり笑って去って行った。
……同胞との全くうれしくもない出会いと、全く悲しくもない別れである。
確かに、俺はその時全く制御できていなかったから笑われても仕方ないかもしれないけどさ、一つだけ言わせてくれ、俺はピチューみたいに自分の電気で痺れたりなんてしねぇ！！！

……それでも、こんな時に電気袋から電気が漏れ出すなんてことはピチューでも滅多にないそうだが、それを聞いたのは今からかなり後の事だ。

（って、そんなこと思い出してる暇なんかないって！早く寝床ｎ「ガシャァァァァァァァァン！！！！！！！」…あ、あががあがががががががががががががががががががあがが！！！！！！！！！！）

俺がとっさに走り出そうとしたとき、俺の頬が一瞬フラッシュを使ったかのように激しくひかり、それを目印にしたかのように、正確に寸分もずれることなく雷が俺に向けて落ちてきて、直撃してしまった。

五話（前書き）

お待たせしました！ポケモンになってしまった俺物語第五話！……って、待ってくれていた人いるのかな…（汗

それでは本編どうぞです。

五話

ｓｉｄｅ　少女

私は今トキワの森に来ている。
トキワの森はトキワシティからそれほど遠くなく町を出て、ものの数分で着くことができる自然が豊かな大森林だ。
虫ポケモンや鳥ポケモン、そしてそのほか多くの種類のポケモンたちが生息していて、まだ１０歳に満たない私はポケモンを連れてはいないから、町のみんなは危ないから近寄らないように言っているのだが、みんなの目を盗み度々この森に来ている。

確かにスピアーとか気性の荒いポケモンたちもいるけど、スピアー達の縄張りに入らなければ基本それほど危険性はないことを私知っている。
時々その縄張りから出ることもあるが、それは本当に稀なことだ。

この森のポケモンたちの縄張りは大きく分け3つに分類される。
まず第一に先ほど言ったスピアー達の縄張り、これはだいたい森の西側に位置している。
知らずにスピアー達の縄張りに入ったらもう目も当てられない、下手をすれば縄張りを超えてまで追いかけてくる時もあるほどだ。

第二に……まぁ、簡単に言ってしまうとスピアー以外のポケモンたちの縄張りだ、これはだいたい森の東側に位置している。
基本的に気性が穏やかで、その縄張りに入っても滅多に襲ってくることもなく、トレーナーやそれ以外の人たちがトキワシティからニビシティへと行くときに使う道もこちらにある。
まぁ、オニスズメなどといった一部危ないポケモンもいるが、それでもスピアーに比べたらいくらかましで、こちらから何かしない限り襲ってくることは稀だ。

そして第3に、縄張りといったがこの3つ目は基本誰の縄張りでもなく、森の中心部に位置している。
そこは他よりも木々が生い茂っており、さらに常に濃い霧が発生していて、人だけでなくポケモンですら簡単には入ることができない場所であり、まだよく知られていない部分が多い場所らしい。

なぜ、１０歳にも満たない私がこれらのことを知っているのか、それはもちろん何度も来たからということもあるが、それ以外にも理由がある。
その理由を言う前に少しこのトキワシティというところについて説明をした方がいいかもしれない。
トキワシティはトキワの森という大森林が近くにあるため、その恩恵を受け空気が澄んでいて更に質のいい木の実なども取れることで有名であり、わざわざ遠くから木の実を買うためだけに来る人や、療養目的で疲れを癒しに来る人もいるほどのカントー地方でも有数の名所だ。

だが、その恩恵というのはただそれだけではない。
そのトキワの森には昔から不思議な力があるとされている。
大昔からあり続けるその広大な森はそれだけでかなりの神秘性を孕み、尚且つその森の深部ではその神秘性に引き寄せられてか幻のポケモンといわれるミュウを含め、その他にも珍しいポケモンが度々目撃されているようだ。

先ほども言ったが、深部では他のところ以上に木々が生い茂り、それに加えて常に濃い霧が発生していることもあり人はおろか、ポケモンでも簡単に入ることができない場所だ。
しかし、そこに一切ポケモンが生息していないかと言われればそうでもなく、そこにもちゃんとポケモンは生息している。
ただ、そこにいるポケモンたちは他と比べてかなり強い力を持って

いるのだが。

大昔からあり続ける大森林、その神秘性、そして他の場所以上に強いポケモンたちが存在する謎に包まれた森の深部。
それらの事から、トキワシティに住む人の中にはそこを神聖な場所として「聖域」と呼ぶ人もいるようだ。
たまに興味本位で「聖域」に入ろうとしたトレーナーが過去にもいたらしいのだが大抵が逃げて帰ってきてしまう。
その生半可な力では入ることができないところもその場所がよく知られていない原因にもなっているのかもしれないし、「聖域」と呼ばれる所以なのかもしれない。
ならば空からという人もいたのだが、それもその領域に住むポケモンたちが邪魔をしてうまくいかない。
しかし、それでも絶対に入れないというわけではなく何人かのとても強いトレーナーはその最奥に行くことができたらしいのだが、そのトレーナーたち全員がなぜか口を閉じて語ろうとはせず、それでもしつこく聞こうとするとそのトレーナーたちは口をそろえて同じことを言っている。

「あの場所は人が踏みにじってはいけない場所だ」

まぁ、森の深部の話はそれくらいにしておくとして、そんなトキワの森の不思議な力のせいかどうかはわからないが、このトキワシテ

ィでは数十年に一人の割合で不思議な力を持った子供が生まれてくる。

その力とは

「ポケモンの意思を読み取り、ポケモンの傷を癒す」力だ。

……ここまで言ったらもう気づいてるかもしれないけど、その不思議な力を持って生まれてきたのが私だ。

最初に気付いたのは5歳くらいの時。
両親が共働きで、私は家でいつも一人ぼっちだった。
そんなある日、ついに家で一人でいることに我慢できなくなって、誕生日に買ってもらったスケッチブックとクレヨンを手に取り家を飛び出した。
そしてその時、トキワの森に初めて入ったのだ。
そこで見るものすべてが初めてのものばかりで、私は初めて両親に誕生日のプレゼントをもらった時と同じくらい、いや、それ以上の感動を覚えた。
周りは大きな木でいっぱいで、たくさんのポケモンたちが楽しそうに追いかけっこをしていたり、美味しそうに木の実を食べたり、気持ちよさそうに眠っていたりしていた。

そんなポケモンたちの姿を私はいつの間にか無我夢中でスケッチしていた。
絵なんて初めてだったからうまく描けなかったが、それでもポケモ

ンたちの姿を描いてるだけで時間を忘れるほど楽しくてしょうがなかった。
何日も何日も、そして何枚も何枚もポケモンたちの絵を描いた。
何度か町の人たちに一人で森に行くのは危険だからと注意をされたが、もちろん私は止めることなどできなかった。

そしてそんなある日の事、その日も私はいつものようにポケモンのスケッチをしていた。
この日は気持ちよさそうに眠るコラッタの絵を描いていた。
何枚も絵を描いていることもあって、最初の頃よりはうまく描けてるんじゃないかなぁと、描いている途中の絵をジッとみてみるが、自分じゃよくわからない。
ただポケモンの絵を描いてるだけで楽しいとはいっても、やはり描くからにはうまく描きたいと思うもの。
いつかもっとうまく描けたらいいのにと思いながら最後まで書き上げ、溜息を一つ。

『わぁ、上手だね！』

そんな時、いきなり誰かから声をかけられた。
私は慌てて声の方を振り返ると、そこには誰もおらず……いや、一匹だけいた。
さっきまで私がスケッチしていたポケモンのコラッタが、いつの間にか私のそばに来て描いたスケッチを見ていた。

「……え？」

『いつも君が森に来て絵を描いたから気になってたんだ！こんな上手に描いてくれてありがとう！』

「え、えっと……どう、いたしまして？」

それが私とポケモンたちの最初の対話だった。

最初のころはいきなりのことで戸惑っていたけど、今ではその力のおかげでたくさんのポケモンたちと友達になれたから、この力には感謝している。

ちなみにこの力のことは両親以外に話してはいない。

ポケモンたちが、私のこの力を狙って悪い人たちが私を利用しようとするかもしれないから、秘密にしておいた方がいいっていったからだ。

私もこの力が悪い人たちに利用されるなんていやだ、だからこの力のことは私が自分のことを自分で守れるようになるまでは他の人には言わないようにしよって決めた。

そのことを両親に伝えたら、快く了承してくれた。

何の苦言もなく、快く了承してくれたことに私は疑問を覚えたのでそれを聞いてみると、なんと前の森の恩恵を受けて生まれてきたのがお母さんのお母さん、私が生まれる前に死んでしまったというおばあちゃんだったのだ。

その時おばあちゃんはその力のせいでいろいろ苦労したそうで、そのことをお母さんはよく聞かされていたそうだ。

だからだろう、私の話を聞いて快く了承してくれたのは。

さて、今日もいつものようにスケッチをしに来たんだけど、今日はそれだけじゃない。
昨日の午後から急に雨が降ってきて、私も急いで帰ったんだけどその途中で雷が森に落ちたのが見えた。
雨が降ってたから山火事にはならないとは思うんだけど、もしその雷がポケモンたちにあたってたらと思うと心配だった。
だけど、私の最初の友達のコラッタ、ラっちゃんが早く帰らないと雨で濡れて風邪をひくと私を心配していたので昨日は後ろ髪を引かれる思いで家に帰ったんだ。
そのことがどうしても気がかりで、今はスケッチをする前にその雷が落ちたところを見に行くところ。

だいぶ歩いて雷が落ちたところに近づいてきたのか周りの木々が焦げていたり倒れていたりしている。
ここに来る途中、倒れていたり怪我をしているポケモンたちはいなかったからうまく逃げることができたんだと思う。
そしてそこからそれほど歩くこともなく、雷の落ちたところと思われる場所にたどり着いた。
そこは先ほど以上に被害がひどかった。
雷が落ちたと思われる場所は小さなクレーターができており、その周囲は雷によって破壊されたと思われる木々が散らばっていた。

「うわぁ、すごい。真っ黒こげだぁ」

クレーターの中心が焦げて黒くなっている。
クレーターの範囲、焦げ具合、周囲の被害、どれをとってもすさまじい威力だったのだろうと、そう想像するだけで怖気がする。

……ン……ブ……ブーン……

「……ん？」

そんな時、少し離れた茂みの奥から何やら音が聞こえてきた。
その音に何の音だろうと疑問が浮かぶが、次第に大きくなっていく
その音に私は嫌な予感がし、心臓の音がどんどん大きくなっていく。

……ブーン……ブーン、ブーン……

「ま、まさか……」

その音は間違いなく羽の音。
この森の中でも、空を飛ぶポケモンは限られている。
鳥ポケモンであるポッポやオニスズメ、数は少ないがそれらの進化系であるピジョンやピジョット、オニドリル。
しかし、この羽の音は鳥ポケモンのはばたく音とは違う。
そして次に思いついたのがバタフリーだが、この羽の音はバタフリーとも違う。
この羽の音は確かに虫ポケモンの羽の音だろうが、その中でもかなり独特の羽の音。
そして、この森にいる虫ポケモンでこの羽の音にぴったりと合致し、そして嫌な予感がするほどの危険なポケモン、それはもうあのポケモンしかいない。

高速で飛来し、縄張りに一歩でも踏み込んだ者には容赦せず、狙った獲物は執拗に追いかける森のハンター、その鋭い針は岩をも容易く貫通させるほどの威力を持つといわれている危険なポケモン。

……スピアー

「は、早く逃げなくちゃ！」

私はそのポケモンに思い至った瞬間、町の方に向かって走り出した。
私は走りながらも疑問に思う。
なぜ？なぜ、スピアーがこんなところに？
この場所はスピアーの縄張りからそんなに離れてはいないが、それでも縄張りの外だ。
今はスピアーの気性が一番荒れて縄張りの外に出る可能性がある時期とされている繁殖期とも違うから安心していたというのに。

そう考えているうちに、ついに茂みの中から恐れていたポケモン、

スピアーが飛び出して、逃げている途中の私に向かって襲いかかってきた。
そのスピアーは体の所々がうっすらと煤けていて、目が赤く輝いているという怒っているか、または混乱している時によく起きるといわれている現象が起きていた。
そんな様子に私は一つピンときたことがある。

「も、もしかして、昨日の落雷がスピアーの縄張りにも落ちてたの!?」

私が昨日見た落雷は一つだけだったが、あの後も何度か雷が落ちる音が聞こえていた。
そのいくつかが、もしかしたらスピアーの縄張りに落ちてしまい、パニックを起こしたスピアーが縄張りを離れてしまったのかもしれない。
それなら、あのスピアーの体の所々が煤けているということも納得できる。
この森には炎を使うポケモンなどいないのだ。
あんな状態になる原因は少なく、トレーナーとのバトルのせいかもしくは今回のように落雷による被害くらいだろう。
とにかく、今はその原因がどうとか考えている暇などない。
いつも一緒にいてくれる頼りになる友達のラッちゃんは今はおらず、私に残された道は逃げるしかない。
ただでさえ素早いスピアー相手に子供である自分がどこまで逃げ切ることができるかはわからないが、それでもここであきらめてしまったらすべてが終わってしまう。

私は必死にスピアーに追いつかれないように走り続けた。

しかし、やはり子供の足、いや仮に大人の足だったとしてもスピアー相手に逃げ切れるはずもなく、かなり離れていたはず距離がほんの数秒で縮められてしまった。

スピアーは私にその大きな針を突き刺そうと針を向けてきた。

「っ！　……きゃっ！？」

もう少しで私に届くといったところで私は何かに躓いて倒れてしまい、私を狙っていた針は私の少し上を素通りしてしまった。

スピアーも急に目の前からいなくなった私に慌てたようだが、しかしその加速していたスピードのせいで急に止まることはできず、そのまま少し先にあった木にぶつかり針を刺してしまった。

何に躓いたのか、それを見ると地面から出ていた木の根っこだ。

どうやら走ることに必死になり、足元の注意がおろそかになっていたようだ。

しかし、そのおかげというのもおかしいが、スピアーの攻撃をかわすことができた。

スピアーを見ると刺さってしまった針がなかなか抜けず四苦八苦しているようだが、私はこれ幸いと立ち上がり急いでこの場から走り出す……ことはできなかった。

「い、いたっ！」

立ち上がろうとしたその時、急に右膝に激痛がはしりその場に崩れ落ちてしまった。
どうやらさっき転んだ時に膝を痛めてしまったようだ。
そのことに私は軽い絶望感を覚えたが、せめて少しでも距離を稼ごうと何とか立ち上がり痛む右膝を引きずりながらその場を離れる。

しかし、それは無駄なことだったかもしれない。
私がその場所からそれほど離れていないにもかかわらず、どうやらスピアーは木から針を抜くことに成功したようだ。
それほど離れていないし、隠れることもできなかった私はすぐにスピアーに見つかってしまった。

私を見つけたスピアーは再び私を攻撃しようと針を向けて突撃しくる。
それに慌てた私だがそれがいけなかったのか、慌てて逃げようとした途端足を痛めたことをすっかり忘れてしまい全力疾走しようとして、再び右膝に激痛が走りその場に倒れてしまった。
さっきは攻撃を受ける瞬間、急に倒れたおかげでやり過ごすことができたが、今度はそうはいかない。
スピアーは私が倒れたところをその目でとらえ、攻撃する位置を修正してきた。

対して私は膝の痛みで動くことができない。
仮に動けたとしてもすでにスピアーとの距離はあまりなく、どのようにしてもスピアーの攻撃から逃れる術を私は持ち合わせてはいなかった。

スピアーの針は岩すらも貫通するほどの威力を持つと聞いている。
そんなもので攻撃されれば私などひとたまりもなく、間違いなくその針に串刺しにされるだろう。
そんな絶望的な未来を想像してしまい、私は怖くなってスピアーの攻撃が私に届く瞬間身を強張らせギュッと目を閉じた。

……その時だ

ギィシャァァアアアアァァァアアァ！！！！！！

私の近くで雷鳴が鳴り響いた。

「……ふぇ？」

つい先程まで私を支配していた恐怖が突然の雷鳴により、恐怖から驚愕へと変わった。
私は突然のことに戸惑いつつもゆっくりと目を開ける。
すると、目の前には私を襲おうとしていたスピアーがいなくなっていた。
どこに行ったのか探してみると、簡単に見つかった。
スピアーは私から離れたところの木の下にいた。
しかし、ただいただけではない、体中がやけどをしていて羽はボロボロ、気を失っているのかどうかはわからないが、ダメージが酷いようでその場から動けずにぴくぴくと痙攣していた。
なぜスピアーがそんなことになっているのか、そんなことはわから

ないが、これだけはわかる、私はどうやら助かったようだ。

ガサッ

「ッ！？」

そう安堵した瞬間、スピアーとは反対方向、つまりスピアーを見ていた私の後ろの方向から、物音が聞こえた。
スピアーのことで神経質になっていた私はその音に必要以上に驚き、視線を向ける。
するとそこにいたのは、スピアーのような危険なポケモンなどではなかった。

黄色い体に尖った耳に雷のようなギザギザの尻尾、真っ赤な丸い模様が頬についたこの森でも滅多に人前に姿を見せることはないポケモン。
そのポケモンは体中酷いやけどを負っていて今にも倒れてしまうのではないかというほど酷い怪我をしているにもかかわらず、しかし

その目には戦闘不能寸前とは思えないほどの強い力が籠められており
りその目を私に、いや私の後ろにいるスピアーに向けていて、その
頬からは電気が迸っていた。

その姿を見てようやく気付く、どうやらスピアーを撃退し、私を救
ったのはそのポケモンなのだと。

「ピ、ピカチュウ？」

五話（後書き）

はい、今回は我らがピカチュウから視点を外してみました。

トキワの森についてちょっとオリジナル要素入れてみたのだけど、今後に反映されるのかちょっと自分でも疑問に思っていたり…（汗

でも、ポケスペでトキワの森を見る限りではこんな感じの要素が入っていてもそれほどおかしくはないんじゃないかなぁ？っと思ってみたり。

見たところ、トキワの森と同じくらい古いだろうウバメの森でもかなりの神秘性を醸し出していましたし、これくらいあってもいいですよねぇ…（汗

まぁ、オリジナル要素入れるにあたってその説明のところがかなりぐだぐだになってしまった感が否めないですが……（大汗

そ、それでは、また次回もよろしくお願いします！

最後に、技の擬音とかってかなり難しいですね、ギシャァァとかグォォォォンとか、すごい技を使うときに使ってみたいものではあるのですが、なかなか……。

もっといろんなｓｓ見て勉強しようと心に決めた今日この頃です。

番外編～Ｉｆ　ＥＮＤ～（前書き）

みなさん、お久しぶりです。

今まで待っていてくださった方は本当にありがとうございます。

今までなぜ投稿できなかったといいますと、実は私の住んでいる場所も放射能の影響による屋内待機（退避だっけ？）区域にあたりまして、区域外に避難しておりました。

今回投稿できましたのは必要な荷物を持ちに一時帰宅のためです。

そして、この投稿が終わったらまた避難しますので、またしばらく投稿できそうにありません。

そんなわけでして、いつになるかもわからない、もしかしたらこのまま未完で終わるかもしれないという可能性も否定できない状況のため、本当はあまりこういうことはしたくなかったのですがポケモンのほうは番外という形でｉｆＥＮＤというものを投稿してみようと思います。

これは私が以前から考えていたポケモンのほうの最終回なのですが、このような投稿がいつになるかわからないとか、未完で終わるかもしれないという可能性が出てきた以上番外としてでも一応区切りはつけておいたほうがいいのではと思い、このような考えに至りました。

今まで、そしてこれからもいろいろとご迷惑をおかけしますこ

と、ここで改めてお詫び申し上げます。

それでは、番外編～ｉｆ　ＥＮＤ～をどうぞ。

番外編～Ｉｆ　ＥＮＤ～

ブク

ブクブクブク

（……ここは、どこだ？）

閉じられていた眼を開けてみると、どうやら俺は何かの液体の中にいるようだ。
透明でほのかに暖かく、どこか安心するそんな液体の中に俺はいる。
母体にいる胎児はもしかしたらこんな感じなのかもしれない、そう

思わせる。
ならばここは誰かの子宮の中なのだろうか、そう思うもどうやらそうでもない。
もし俺が体内にいるならこれほどまでに明るいはずもなく、身体にコードのようなものがいくつも繋がれているはずもない。
俺は一体……

ここにいる前の記憶を辿ってみる。
ここにいる前、そう俺が人間からポケモンへと姿を変えてしまいポケモンの世界へと降り立った時のことだ。
俺は長い間共に旅をしたこの世界で唯一俺の事情を知る、いろんな意味で特別な存在といえるイエローと共に彼女の生まれ故郷であり俺との初めて会った思い出の場所トキワの森に戻ってきていた。
トキワの森、古くからこの世界に存在している神秘的な力を持ち、人間たちにたくさんの恩恵を与えてきた大森林だ。
トキワの森はその神秘性ゆえか珍しいポケモンが度々訪れるようで、

かの幻とされているミュウも過去何度かこの森で見かけられている。
そして今回俺たちがこのトキワの森に戻ってきた理由は最近またここに幻のポケモンミュウが目撃されたと情報があったからだ。
恐らく、この世界で俺を元の世界に戻すことのできる唯一の手段はミュウにあるのではないかとにらんでいる。
全てのポケモン達の原初にして、全ての力を行使することができるこの世で唯一無二の存在。
噂ではこの世界が誕生した時から存在していて、場所によっては神として崇めていることもあるほどだ。
おそらくミュウにもできないのなら、この世界のどこを探しても俺が元の世界に帰る方法など存在しないだろう。

俺としては今ではこの世界が好きになっているし何よりイエローと共いることに安らぎを感じることができたときから元の世界に戻ることの重要度は俺の中ではかなり低くなっていた。
だからもし戻れなくてもこの世界で彼女と一緒に旅をしたりのんびり過ごすのもそれはそれでいいかもしれない、そう思っている。
それでも、やはり前の世界に対し未練もあるわけで、重要度が低くなったからと言って帰りたいという思いがなくなったというわけではないのだ。
なので、この森に来たのは最後の賭けとしてミュウと会うためである。
これで戻れるならそれでよし、戻れないならそれはそれで諦めがつく。

森の最深部、トキワシティでは聖域とされている神聖な場所。
今までの目撃情報からしても、ミュウはその最深部にいる可能性が高い。
そこにいるポケモンは他以上に力のある存在ばかりで一流と呼ばれるトレーナーでも苦戦するという、そんな場所だ。
確かにトレーナーとして力をつけてきた彼女だし、最初のころと比べると段違いの力を持つことができた俺である。
しかし、結局彼女は「戦う者」としての才能は低く、俺自身も力を上げたといっても主人公であるサトシのピカチュウに若干劣るくらいだ。
そんな俺たちは二人合わせてもとても一流と呼べるものではなく、そんな俺たちで聖域に入るなど無謀もいいところかもしれない。
それでも今ここにミュウがいる可能性が高く、そしてこれを逃せば次の機会に巡り合える可能性は果てしなく低い。
帰還を若干諦めているとは言ってもそれでも完全に諦めきれているわけでもない。
そんな俺の心情をくんでか、こんな危ない場所というのにもかかわらずイエローもイエローのポケモンたちも一緒に来てくれた。
俺は本当にいい仲間たちに巡り合えたものだ。

そして、いざ聖域に足を踏み入れてみると予想していたそこのポケモンたちの猛襲はなかった。
そこでニドキングに遭遇もしたのだが、通常のニドキングを一回り大きくした威圧感を持つその巨体に若干引け腰になっていると、ニドキングはイエローを一瞥し踵を返してしまった。

それには流石に俺も彼女も一瞬呆けてしまったものだ。
そのあとも何体かポケモンたちに遭遇したのだが、そのどれもが最初のニドキングと同じようにイエローを一瞥した後その場を去っていく。
どうしてか、そう頭をひねっていると俺はふとイエローの力を思い出した。
「ポケモンの意思を読み取り、傷を癒す」力、それはこの森の恩恵を受けて手にしたイエローの特殊な力。
そして、あのポケモン達もこの森の恩恵を受けている。
恐らくだが恩恵を受けた者同士、資格ありとしてイエローがこの聖域に入ることを認めたのかもしれない。
だが、もし恩恵を受けた者が悪者だったらどうするのだろうか、そう思ったが以前イエローに「恩恵を受けた人たちの中で悪者になった人は存在しない」そう聞いたことがある。
そういえば、ポケスペで数多くの騒動を起こしたワタルもその根はポケモンを想いポケモンのために涙した心優しい者だったのを思い出し、なるほどと納得した。

そして、そうこうしているうちに辿りついた森の最深部。
そこで俺たちはとうとうミュウに会うことができた。
そして聞いた、俺の知りたい全てのことを。
それを聞くと俺は呆れてしまった。
俺がここに来たのは俺が何か特別な存在だったからというわけでもなく、死んで転生したというわけでもなく、ただ単に巻き込まれただけだったようだ。
ミュウと、ミュウを基に作られたミュウと同格の存在ミュウツー。
最強の二柱の戦い、その戦いは苛烈を極めその強力な力のぶつかり合いで空間が歪み、世界を超えて偶然俺を巻き込んでしまったそう

だ。
ポケモンに姿が変わってしまったのはそれもまた混ざり合った二つの力による影響らしく、もしかしたらピカチュウ以外に変わってしまっていたかもしれないそうだ。
つまりこれは映画版でサトシが石化してしまったことと同じ現象というわけだ。
それを聞くと、まぁ不幸中の幸いなのだろうか、納得できないところもあるが納得するしかないだろう。
死んだわけでもないのだから、まぁそこはいいとしておこう。
そして、肝心のもとの姿へ戻ることともとの世界への帰還についてだが、それもどうやら問題ないそうだ。
まぁ、サトシも元に戻ることができたのだから、それと同じ現象が俺に起きて元に戻ることができないということはないと思ってはいたのだが、それでももしもということがあるからな、それを聞けて俺は心底安心した。

と、いうわけでさっそく俺を元の姿へと戻してもらうことにした。
ミュウは一鳴きすると光の玉が前に現れ、それが俺の体に吸い込まれるように入ってきた。
すると、俺の姿が一瞬光り、その光が収まるとピカチュウではなく元の俺の姿へと戻っていた。
ピカチュウのように素早く動けるわけでもなく、強力な電撃を操ることができるわけでもない人間という不便利な体だというのに、とても懐かしくとてもうれしく知らず知らずのうちに俺は涙を流していた。
その隣でイエローもともに喜びを分かち合ってくれたのか俺を見て涙を流していた。
それがまたとてもうれしく、俺は彼女を抱きしめていた。

彼女はそれに一瞬驚いたようだが、彼女も俺の背に腕を回し抱きしめ返してくれて「よかったね、よかったね！」そう何度も言ってくれた。
しばらくして俺たちが離れると、先ほどまでの行為による気恥ずかしさでお互いに顔をうっすら赤くしていた。
そんな俺たちをミュウはニヤニヤしながら見ていたが、はっきり言ってかなりむかつく。
とりあえず一発殴ってやろうと拳をふるうが、人間に戻り身体能力も戻った俺の拳などミュウにとってはコイキングの体当たり以下、クスクスと笑いながらひらりと躱してしまう。
それがまたいやに俺をイラつかせ、俺は半ばヤケになり拳をふるい続けた。
拳をふるっては躱しふるっては躱し、そのやり取りを何度も繰り返す。
そんな俺たちを見てイエローはクスクスと笑っていた。
流石俺の相方、こいつと違って控えめでかわいいらしく笑っている！
そんなイエローの姿に俺の心は何度癒されてきたことか。

……そんな楽しい時間ももう終わってしまう。
確かに俺はこの世界でイエローと共に生きていくのもいいかもしれない、そう思ったがそれは元の世界に戻れなかったらの話だ。
そして、今俺の前に俺を元の世界に返すことができる存在がいる。
ならば俺は帰らなくてはいけない。
俺の世界はここではないのだから。

そして、とうとう元の世界へと帰る時が来た。
イエローも俺との別れを惜しみ涙を流している。
先程までの喜びを分かち合った時の涙と違い、今の涙は俺の胸を苦しいくらい締め付けるほど嫌な涙だ。
だが、彼女は俺を引き止めない。
引き止めたい、もっと一緒にいたい、そう思ってくれているのは俺にだって解る、だがそれでも彼女は引き止めない。
俺が元の世界に帰りたいという思いを彼女は知っているからだ。
俺だって、イエローと一緒にいたいと思う、もっと一緒に旅したいと思う。
それでも、この機会を逃したらもうないかもしれない元の世界へと変える手段。
この世界は確かに好きだ、だけどそれと同じくらい元の世界に愛着があることにここにきていろいろと旅をしている間に気付かされた。
だから、帰れるとわかったのなら俺は帰りたい。
イエローを見つめる、彼女は袖で涙をふくと一生懸命無理をして俺に笑顔を向けてくる。
そして一言「さようなら」そういった。
それに俺も答え「さよなら」そう返すとミュウに向き直る。
ミュウは俺に「いいの？」と視線を向けてきたが俺はそれに頷いて返す。
それを受けると、ミュウは先ほどと同じように一鳴きする。
すると、俺の周りの空間が大きな力により歪み始める。

そして

ドカァァァァァァァァァン！！！

俺がそこから姿を消す瞬間、大ききな爆発が発生した。
何が起きたのか、消える瞬間最後に見てみると上空には沢山のヘリコプター。
そしてそのヘリコプターの側面には大きく「R」のマークが描かれていた。
それを見たとき、ちょうど俺はこの世界から姿を消した。

『……あ、やば』

……そんな、ミュウの声が頭の中に響いたような気がした。

それで

今に至るというわけだ。
あの最後に見たヘリコプター、あの「R」のマーク、恐らくロケット団だろう。
たぶん俺たちと同じようにミュウの情報を聞きつけ捕獲しに来たのだろう。
まぁ、ミュウの事だから心配はいらないだろう。
俺が今心配しているのはあそこに残ったイエローの事だけ。
彼女の仲間たちもなかなかの力を持っているのだが、それでもあれだけの敵相手に攻められて無事では済まないだろう。
しかし、いくら俺が心配してもすでに俺にはどうすることもできない。
ピカチュウとしての力が失われ、恐らくだがミュウの力で世界を移動してしまっただろうから。

（あの聖域のポケモン達とミュウを信じるしかないか）

あそこに住むポケモンたちは、実際に俺たちが戦ったわけではないがそれでも遭遇した時に感じたあの圧倒的な威圧感、一流のトレー

ナーであってもそうそう敵うものではないだろうという噂に偽りなしと感じさせられた。
いかにロケット団といえどいかに数で勝っていようとそう簡単に勝てるものではないだろう。
故に、俺にはイエローが無事でいてくれることをただ信じるしかできない。

それでここからが本題だ。
俺がいるこの場所、ここはどこなのだろうか。
ミュウに間違いがなければここは俺の家の俺の部屋であるはずだが、間違っても俺の家はこんなどこかの研究所のような場所ではない。
そして俺の体だが、あまり満足に動けない身で確かなことはいえないが、若干小さくね？と思える。

（もしかしてミュウの奴、送る場所間違えた？）

……いや、間違えたというよりあのロケット団の介入によりいろいろとずれたと考えた方が正しいかもしれない。
流石のミュウもあのいきなりの介入で正確に送ることはできなかったのかもしれない。
そしてこの若干小さくなった体、もしかしたらミュウの力がロケット団の介入により暴走……かどうかはわからないが、そんな感じのことが起きて以前のように体が変質してしまった可能性も否定できない。

（……くそ、ロケット団が！もし今度見つけたら十万ボルトぶち込んでやる！　……あ、俺もうピカチュウじゃないんだった）

『……実験体の起動を確認』

と、そんなことを考えていると、どこからか機械的な男性のものとも女性のものともわからないような声が聞こえてきた。

『……心拍、脳波共に正常……精神状態…安定域を保っており暴走の危険性軽微と判断……』

どこから聞こえてくるのか、体を自由に動かせないから確認もできないのが歯がゆいが、その声は俺の気持ちなど気にするべくもなくただ淡々と言葉を紡いでいく。

『……規定された最低条件をクリア……実験体の完全起動を承認……培養液…排出……』

その声と共に俺につながっていたコードが外されていくとともに、俺を包んでいた液体がどんどんと無くなっていく。
そして、その液体が完全になくなったとき、目の前のガラスのようなものが大きくスライドする。
俺は周囲を警戒しながらその中から外に出る。

……フラッ

（うぉ！？）

いきなり足の力が抜け俺は前のめりに倒れた。

再び立ち上がろうとするが、なぜか足に力が入らずまるで生まれたての小鹿のようだ。
俺は近くにある台に手をかけてふらふらとしつつも何とか立ち上がる。
すると、その俺が手をかけていた台に数枚の紙が置いてあった。
その本に書かれていた文字は見たこともないような文字だったというのに、なぜか俺にはその文字が理解できた。
そして、その中の一枚に書かれていたもの、それは……

＜『エリオ・モンディアル』のクローン体、？３６号の強化実験＞

……

……

……

……

……

……

「え、エリオオオオオオオオオオオオオオ！？」

この日、俺は元の世界に帰還することはできず、何の因果かエリオ・モンディアルのクローン体に憑依してしまった。

番外編～Ｉｆ　ＥＮＤ～（後書き）

はい、これで一応ｉｆ　ＥＮＤ終了です。

ピカチュウと電気つながりで、あまり見ることのないエリオへの憑依？をさせてみました。

こんな感じで最終回を迎えて、次回からリリカル世界！へとやっていきたかったのですが……。

それではみなさん、この話は一応これにて一区切りとさせていただきます。

できたらまた続きを書きたいと切に願います。

それではまたいつか。

六話（前書き）

久しぶりの投稿です。

やっとパソコン生活に戻ることができた！

しかし、私は今現在就活と卒論という二重苦を味わっている真っ只中。

なので、これからの投稿もまた不定期投稿になると思いますが、どうか見捨てないでやってくれるとうれしいです。

それでは、本編のほうをどうぞ。

六話

『……う…ッ！？　……あぁぁぁぁ、いってぇ！』

俺が目を覚ました時、まだ意識が朦朧としていたのだが目覚まし代わりとばかりに激痛が体中を走り、そのおかげか徐々に意識がはっきりとしてきた。

『……俺は…確か、巣に帰る途中で雷に撃たれたんだったか』

周囲を確認してみると、雷の落ちた場所だっただろう自分を中心に炎ポケモン同士が激闘したのではないかというほどあたり一面が焼け焦げている。
これだけの焼け焦げ具合だというのによく山火事にならずにここら一帯だけで済んだなとも思ったが、地面の湿気の多さと所々にある水たまりを見つけてそういえば昨日は雨も降っていたなと思い出して一人納得した。

『てか、いくら俺が電気タイプだからって自然の雷が直撃してよく生きてられたな。いや、十分に酷い火傷だし今も死にそうなくらい

痛ぇけど』

少し体を動かすだけでも体中に走る痛みに顔をしかめる。
この世界にゲームのようなステータス表示などありはしないが、もし仮にあったとするならば今の俺の状態は麻痺&火傷のダブル状態異常で、ＨＰが残り１のレッド色地点で危険音が鳴りっぱなしの瀕死一歩手前状態だろう。
下手すればそのままお陀仏ということも考えられるほど、この体にはダメージが蓄積されている。
トレーナーがいたならばボールに戻すことでひとまず悪化を防げるし、そのあとセンターに行けば万全の状態に治療してくれるのだが、俺は野生でそんなことは望めない。
ポケモン自身が持つ人間をはるかに超える自己回復能力もあるのだが、それをもってしても回復が追いつかないほどに酷い状態だ。
持っていた木の実で体力の回復を図ろうにも雷の影響でほとんどが食べられたものではなく、残ったものを食べてもそれほど体力が戻った気配がない。

（……これは…本格的にやばいかも）

どうするかと考えている時に、ポケモンとしての鋭い聴覚が離れたところからこちらに何かが向かってくる小さな音を察知した。
もしかしたら知り合いのポケモンかもしれない。
知り合いでなかったとしても、お願いして木の実を持ってきてもら

えればそれで助かる。
そう思っていた。
しかし、その小さな音がどんどん大きくなっていくごとに、俺の中にある危険信号のようなものが警報を上げる。
近づいてくる音、羽ばたく音、しかし鳥の羽ばたきではなくどちらかといえば虫独特の羽ばたき。
そしてこの森において虫ポケモンの中でもその独特な羽ばたく音をさせるポケモンは、俺の知る中で一種類しかいない。

（……ま、まずい！）

俺は痛む体に鞭を打ち、体を引きずりながらその場所を移動する。
どんどん近づいてくるその羽ばたき音に心臓の音がどんどん早くなっていく。
今の状態で奴に会ったら間違いなく命がない。
ろくに体を動かすこともできず、ろくに反撃もできず、一方的に攻撃を受けるだけだ。

（……早く…早く！！！）

途中途中にある砕けた木片に躓きうまく進めない。
それでも俺は動くことを止めない。
そして俺はやっとの思いで近くの茂みに到着した。

その茂みに身を滑り込ませ、息を潜ませる。
ちょうどその時、向かいの離れた茂みの中から一匹のポケモンが姿を現した。

（……やっぱり……スピアー！）

この森の中で最も危険なポケモンとされている一匹だ。
だが、そこで俺の中に疑問が生まれた。

（……だけど、何でここにスピアーがいるんだ？）

ここはスピアーの縄張りではない。
縄張り意識の強いポケモンというのは基本的にその縄張りを出て行動するということは滅多にない。
しかも、スピアーのように群れで行動するタイプはなおさらだ。
では、なぜスピアーが縄張りを離れてこんな場所にまで来ているのか。
様子を見てみると、スピアーは落雷の影響で荒れた場所の上を行ったり来たりと忙しなく飛び回っている。
何かを探しているのかとも思ったが、スピアーの動きに一貫性がなくどうにも探し物をしているようには見えない。

更によく見てみると、スピアーの体には至る所にうっすらと焦げたところが見られる。
そして、そのスピアーの目はポケモンが混乱している時に見せる症状と同種に赤く輝かせていた。
そこからだいたいの予想を立てることができた。
恐らく、あのスピアーは俺と同じく昨日の雷の被害を受けたのだ。
状態を見るに幸か不幸か直撃はしなかったようだが、それでもいきなりのことで驚いたのだろう、混乱を引き起こしそのまま縄張りを出てしまったという感じだろう。

そう予想をしていると、スピアーは別の茂みへと入って行ってしまった。
どうやら俺は見つかっていなかったようでひとまず安堵の息を漏らす。
まぁ、混乱していて冷静さのかけらもない状態のスピアー相手に見つかる可能性は低かったかもしれないが、それでも通常状態でも危険なのに混乱して更に危険度が跳ね上がったスピアーに万が一見つかってしまったら、逃げることができない俺なんてひとたまりもないのだ。

（……ん？）

すると、また何かやってくる音が聞こえた。
もしかしてスピアーが戻ってきたのか！？と、身構えるもどうやら

スピアーではないらしく、この音は足音だ。
昨日の雷での被害の様子を見に来たレンジャーだろうか。
このトキワの森は自然保護地区に指定されているようで、時々レンジャーが異常がないか見回りにきているのだ。
そう思ってみてみると、そこにやってきたのは一人の少女だった。
こんな森の中にあんな女の子が一人でどうしたのだろうか、そう思っていたがどうやら昨日の雷が気になったらしく落雷があって真っ黒焦げになっている箇所をみている。

……それにしても

（あの女の子、どこかで見たことがあるような……）

どこでかは忘れたが、どことなく見覚えがあるように思えてならない。
まぁ、この森にはかなりの人が出入りしているからその中の誰かなのかもしれないが、どうにもそうではない気がする。
どこでだっただろうか、そう記憶を思い返しているといきなり悲鳴が聞こえてきた。
その声につられてバッと顔を上げると、少女が先ほどどこかへといったはずのスピアーに襲われて逃げているところだった。

それを見たとき、俺は痛みで悲鳴を上げる体を引きずり少女とスピアーの後を追った。
こんな体だ、俺が出て行っても何もできないかもしれない。
だけどあの少女のことがどうしても気になり、放っておけない気持ちになった。

痛みに耐えながら移動を続けると、そう時間もかからず追いつくことができた。
少女は地面に倒れ、スピアーは木に針が刺さりぬけないでいる。
見ていたわけでないから何とも言えないが、恐らくスピアーが攻撃する瞬間に少女が転んで目標が外れて木にぶつかったというところだろう。
何とも運のいい少女だ、いや運がいいのならそもそもスピアーに襲われはしないか。
と、そんなことを考えているうちにスピアーが気から抜け出していた。
そして今度こそ逃がさないとばかりに倒れながら少しでも距離をとろうとしていた少女に向かって突撃していった。

（くそ、当たってくれよ！電気ショッ……って、え？）

ボロボロの体でうまく狙いが定まらない、電撃の威力がない、そんな悪条件ではあったがそれでも何としてでも当てようと狙い、今出せる最大出力で電気ショックを撃った。

そう、『電気ショック』を撃ったはずだったのだ。
技を使う瞬間、俺の体の中を今までにないほどの大量の電気が駆け巡る。
そしてその大量の電気が集束し、電気ショックなど目ではないほどの高出力の『雷』となりスピアーに直撃した。

（え、な、なんで……？）

今目の前で起きた出来事にそう疑問に思うも、ガクッと体の力が抜けた。
俺に残った力を全て放出したことによる疲労もあるだろうが、今までの体にあったダメージがたたったのだろう。

俺はこちらに向かってくる少女の姿を最後に意識を手放した。

Ｓｉｄｅ少女

……バタッ

「あ！　だ、大丈夫！？」

急に倒れてしまったピカチュウに私は慌てて近づく。
痛めた膝がズキッと痛むが、それ以上に私を助けてくれたピカチュウの方が気になったのだ。

やっとの思いでピカチュウのもとに辿りついて様子を見ると、とても酷い火傷を負っていた。
私は急いで治癒の力を使いピカチュウの治療を行う。
かざした手のひらから微かに明かりが生まれ、それをピカチュウにあてるとゆっくりとだがそれでも確実に火傷の跡は消えていく。
治癒していく傷痕を見て安堵すると、ふと疑問が浮かんでくる。
このトキワの森には炎タイプのポケモンは私の知る限りでは存在しない。
ならば、この火傷は一体どうやってついたのだろう。
トレーナーとのバトルでつけられたということも考えられるけど、これほどの重傷で治療も行わないまま何日も持つはずがなく、つまりこの火傷ができたのはここ最近のことになる。
そこで私の頭に浮かんだのは昨日の落雷だった。
もしかしたら、あの落雷に巻き込まれてしまったのかもしれない。
あの場所の被害を考えれば、これだけの火傷ができてしまうのも納得がいく。

と、そんなことを考えているうちに、ピカチュウの治療が終盤に差し掛かっていたのを見て、私は力の行使を止めた。
なぜ完全に治療してしまわないのかというと、治癒の力というのは過剰に行使しすぎると逆に害になる……というのをお母さんから聞いたのだ。
お母さんが子供のころにおばあちゃんがよく話してくれたそうだ。
その時々で違ってくるが、なんでも完全に治癒したのにもかかわらず体調を崩してしまうことがあるとか。
これは、力の使い方に慣れていないものが対象を完全に治癒しようとして過剰に行使してしまうことが原因らしい。

だから、私がこの力のことを話した時に、自分の力に慣れるまではある程度までしか治療してはいけないと言いつけられている。
とりあえず、ピカチュウの治療はこれで終了だ。

それで……と、ピカチュウの方を見る。
ピカチュウは治療を終えたというのにまだ目を覚まさない。
傷は癒すことはできたけど、これまでの疲労は癒すことはできなかったのだろうか。
ラっちゃんがいたらこのピカチュウのことを頼むという手もあるんだけど、今日はラっちゃんを一緒には連れてきていないし、もし連れてきていたとしてもやっぱり心配で放っておくことができなかっただろう。

……だから

「……よっと」

私は眠ったままのピカチュウを抱えて、痛む足を引きずりながら家への道を歩き出した。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

七話（前書き）

今回は前回よりも少しは早く投稿できた……かな？

とはいっても、あまり進んでいませんが、そこは勘弁ください。

では、本編の方をどうぞ。

七話

……クン…クン……

（……なんだろう、この匂いは）

暗い暗い暗黒の中、俺の意識を浮上させたのはほんのりと甘く、嗅いでいてどこか安心できるような、落ち着けるような、心地いいそんな匂いだった。
重い瞼をゆっくり開くと、俺の目に飛び込んできたのは見慣れた土臭い大地でも青々と生い茂った草でも高く伸びる木々などでもなかった。

自然のものなどなく、もっと人工的な狭い空間。
以前の俺なら懐かしいとも思わなかったというのに、今ではとても懐かしいと思えるそんな空間。
まぁ、一般的に言う人間の部屋と呼ばれる空間なわけだが。
その空間の中で、俺はさらに小さな籠の中に毛布を掛けられ寝かされていた。

（……俺は確か、トキワの森にいたはずだけど、どうしてこんなところに）

意識が途絶える前の記憶を思い出してみる。
雷に撃たれて体全身に大火傷を負ったこと、スピアーに追われていた少女を助けたこと、そしてその時放出した高出力の電撃のせいで完全に俺の中の力が底を尽き……それからだな、意識が途絶えたのは。
あの時の状況を顧みれば、俺をここに連れてきたのが誰なのか考えなくても一人しかいない。

それに、今になって気付いたが今まであったはずの大火傷の跡がほとんどない。
そのことから考えれば

（……あの時の女の子が、俺を助けてくれたって事か）

助けに出たはずだというのに、想定外とはいえ力の使い過ぎで倒れ逆に助けられたのだ。
一人の男としては女の子のために体を張って助けるというのは人生で一度はやってみたいシチュエーションの一つだったといえるだけに、最後の最後で倒れてしまって

（なんであそこで倒れてしまったんだ俺は！）

と自分のかっこ付かなさに気恥ずかしくなり悶えそうになった。
だが、あそこで自分が出なくてはそれこそあの子の命にかかわる事態になっていたことには変わらないのだ

（俺はできる限りのことをやったんだ、気まずくなる必要なんてないし恥じる必要もないのだ！）

……と、自分に言い訳してみる。

（……にしても）

一通り落ち着いたところでもう一度この部屋の中を見回してみると、壁一面にたくさんのポケモンたちのスケッチが飾られていた。
その一枚一枚はお世辞にも上手とは言えないような出来ではあったが、それでも描かれているポケモンたちはなんのポケモンかと聞かれれば答えられるくらいには特徴はととらえられていた。
絵の才能はともかくとして、よく見ているということは確かだ。
それに何より、絵心はない俺ではあるがそれでもわかるくらいにその対象が生き生きと描かれていて絵を描くことが、ポケモンが大好きなのだろうということが伝わってくる。
きっとこの部屋に包まれている甘い、落ち着くような匂いというのもおそらくはこの部屋の主であろうあの女の子の匂いなのだろう。
ポケモンというのはえてして感情というものに敏感だ。
悪しき心を持つ存在だと本能的に警戒するが、心優しい存在だとこれもまた本能的に安らぎを覚え警戒することはない。
人間だったころにはわからなかっただろうその直感的な物が、今の俺にならわかる。
この部屋にいるだけで漂う甘い匂い、それに安らぎを覚え、心地よさを覚えさせるあの女の子はきっと心優しい女の子なのだろうと。

……ガチャ

そんなことを考えていたその時、この部屋にあるたった一つの扉が開いた。
その扉からこの部屋に入ってきたのは、見覚えのある顔をしたあの女の子だった。

「あ、目が覚めたんだね、よかったぁ！」

目を覚ましていた俺を見て、女の子は心底安堵したといった風で笑顔を浮かべて近づいてくる。

「あんなに酷い怪我してたんだもの疲れてたんだよね、３日も目を覚まさなかったから心配したよ」

……3日か。
なるほど、確かにあれほどのダメージを受けたのだ、いくら治療をして傷は癒えたからと言ってもこの体に蓄積した疲労までは回復することはできなかったのだろう。
本当にこの女の子には世話をかけたものだ。

「あ、3日も何も食べてないからお腹すいてるよね？ちょっと待ってて！」

女の子は急いで部屋から飛び出していくと、そう時間もかからずに戻ってきた。
そしてその手には白い湯気が上がる小さな皿を持っていた。

「お昼の残りなんだけど、お母さんにシチューを温めてもらったんだ。本当な沢山食べさせてあげたいけど病み上がりだし、たくさん詰め込むのはお腹に悪いからってお母さんが言ってたから、今はこれで我慢してね」

そういうと、女の子はそのシチューが入った皿を俺の目の前に置いた。
中身は以前人間だったころに俺が好きだった、いろいろな野菜が入

ったクリームシチュー。
ポケモンになってこんな料理を食べれることはもうないのだろうと諦めていたが……。
あまりの嬉しさに、涙腺が緩み涙目になってしまう。
それを見た女の子はどこか優しい笑顔を浮かべて俺の頭を優しくなでる。

……ナデ……ナデ……ナデ

（……こ、これは…なかなか……）

……ナデナデ…ナデ……ナデ

（……ハッ！？）

……知らなかった、今までオリ主が女の子になでポするものだと思っていたのに、逆にこんな小さな女の子になでポされかけることになろうとは。

こんな女の子にとは言うが、本当に気持ちいいのだ！

なんだこの気持ちのいいなでなでは！？まるでポケ心掌握兵器じゃないか！？

これは俺がポケモンだからなのだろうか、こんな女の子相手に頭をなでられてこんな気持ちになるなんて、人間だったころには絶対信じられなかっただろう。

一体このなでなでで何体のポケモンたちを魅了してきたのだろうか。

危うく陥落するところだった心を精一杯繋ぎ止め、俺は耐えた。

流石に見た目１０歳以下の女の子になでポされる精神年齢もうすぐ２０歳男性というのはシャレにならないと思うんだ。

とりあえず、意識を別のところに持っていこう。

さしあたって目の前にあるシチュー、３日も何も食べておらず俺の腹も空腹を訴えているのだ。

きっと食べ始めたら周囲など気にせず我武者羅にシチューに夢中になるはずだ。

『……い、いただきます！』

「うん、ゆっくり味わって食べてね」

そして俺は白い湯気上がるシチューに口を

（……）

「……」

口を

（……）

「……」

『……ん？』

「ん？どうかしたの？」

その時、小さな違和感が俺の中を駆け巡る。
その小さな違和感に『……あれ、これって』と、ある予想が頭にうっすらとよぎるもそれを否定する。

『え、い、いや、ない……うん、それはないでしょ』

「え、何が？」

（……）

「……？」

シチューに口を近づけたまま停止していた俺はギギギギと擬音を発しながら女の子の方を見る。

『あ、あのぉ、もしかして……俺の言葉、わかるの？』

「え？う、うん、わかるけど？」

俺の言葉（ピカチュウの言葉）に頷きを返す女の子。
この時、トキワの森の時からこの女の子に抱いていた違和感の正体がわかった。
ポケモンのスケッチが大好きで、ポケモンの言葉を理解する、金髪のポニーテールの女の子。
俺の以前の知識の中にそんなキーワードに該当する存在が一人いた。

『え、えっと、つかぬ事訪ねたいんだけど……君の名前は？』

「あ、そういえば言ってなかったよね」

いけないいけない、とでもいうように女の子は自分の頭をコツンと叩く。

「じゃぁ、あらためて自己紹介だね！私の名前はイエロー、イエロー・デ・トキワグローブっていうの」

『……い、イエロー？』

「うん、よろしくね！」

こうして、俺はポケモンの登場人物の一人、イエローとであったのだ。

七話（後書き）

うん、本当にあまり進んでいなかったな。

でも、ポケスペでも好きなキャラであるイエローを出せただけでも私としてはちょっと満足していたり…。

イエローの能力なのですが、「意思を読み取る」というものだったのですが、今後の話の都合上それだといろいろと面倒な気がしたので「ポケモンの言葉が理解できる」という能力にしたいと思います。

簡単に言うと、「ポケモンの言葉が理解できて能力を使うことによってそのポケモンの意志を読み取ることができる」ということです。

流石にそのポケモンの言っていることを聞くために一々「ポケモンに近づき能力を行使する」という工程をふむというのも面倒な気がしたのでこのようにしました。

いろいろと自己の設定を盛り込み読者様を困惑させてしまうこともあるかもしれませんがなにとぞご了承ください。

それではまた次回。

八話（前書き）

どうもお久しぶりです、久しぶりの投稿です。

なんとか以前のように1ヶ月以上も開けることはなかったですが、
それでもこの期間の長さ。

待ってくれている人にはホント申し訳ないです。（いたらの話ですが）

おそらくこれからもこんな感じで不定期で進んでいくと思いますが、
どうかこれからもよろしくお願いします。

それでは、本編の方をどうぞ。

八話

空きっ腹に多くを詰め込むのは胃に悪いといわれつつもやはり3日も何も口に入れていないというのはかなりキツイわけで、イエローが持ってきてくれたシチューも1分もしないうちに俺の腹に収まってしまった。
途中で急いで食べない方がいいとイエローに注意されたようだが、夢中になっていたせいだろうイエローの声はほとんど俺に届いていなかった。
イエローは俺にまだ起きたばかりだからあまり動かないようにと注意をし、空になった皿を手に部屋を出て行った。

（……ふぅ）

シチューを食べ終え水を飲み、腹一杯とまではいかないまでも一心地ついたことで多少の余裕が生まれた。
今はちょうどイエローもいないことだしいろいろ考えを整理しよう。
まずは、イエローの事だ。
俺は今までここはアニメ版ポケモンに似た世界だと思っていた。
それはあのロケット団3バカ（ムサシ、コジロウ、ニャース）の気球がトキワの森を通り過ぎたという情報からもあながち間違いじゃないだろう。
アニメ版主人公のサトシについてはまだ何とも言えないけど、いる可能性は大いにある。
しかし、ここにきてイエローというポケスペの方の登場人物が出て

きた。

つまりこの世界がもしかしたらアニメ&ポケスペの両方の要素を組み込んだ世界の可能性があるということだ。

いや、人によったらだから何？というかもしれないけど、ポケスペの要素が入って来るんだったらいろいろと危険度は増すんだぞ？

例えば、アニメの方にもポケスペの方にも等しくロケット団が存在するが、俺の見た感じだとポケスペの方のロケット団の方がかなり活発な動きを見せているように思える。

人体（ポケモン体？）実験など常日頃、ジムリーダーにまで内通していたり、タマムシシティ占拠を行ったり。

恐らく首領であるサカキの影響力による差なのではないだろうか。

アニメ版のサカキはそれこそ上に座っているだけの成金男みたいな？（一視聴者の見解です）

それに比べポケスペのサカキは自分自らが他方へ赴き見聞を広め、いろいろと発言力を持ち、その上実験などで強化などしていない（予想でしかないが）ポケモンを四天王クラスとタメを張れるほどまでに育てあげるというトレーナーとしての実力も高い。

どちらのサカキが世界征服を果たすかと言ったら俺は迷わずポケスペのサカキを上げるだろう。

まぁ、この世界がポケスペ要素を含んだ世界だとしたらレッドやグリーンなどの図鑑所有者という実力者たちがいる可能性もあるからその人たちに頑張ってもらおう。

……あ、そういえばこの世界のトレーナーの間じゃポケモン図鑑はいわば身分証みたいなものとして常備されているから図鑑を持っているからと言って周囲に与える影響力はそれほど大きくないや。

……ま、まぁ、図鑑所有者だとかそんなの関係なく、彼らの実力は本物だろうしもしもの時は何とかしてくれる……よな？

とりあえずその件は置いておくとして、次行ってみよう。
えっと……あ、そうだ、俺がスピアーに放った予想以上に高威力な電撃についてだ。
そう思いだし、俺は自分の中にある電気量を確かめてみた。

（……ん？最初に比べてかなり量が増えてるな。でも、あの時放出した電気量に比べるとそれほど多くもない。これって……）

そう考えて、俺は思い出した。
俺がスピアーに遭遇する前、天然物の高威力の落雷をこの身に受けたことを。
確かアニメの方でもあったはずだ、ピカチュウが強力な電撃を使えるようになったきっかけとして、その身に大量の電気を受けたことが。
それと同じ理屈で俺の電気総量も増えていたのだろう。
そしてあの時は雷を受けた直後だったため雷の影響で大量の電気が体に蓄積されていた。
スピアーに攻撃する際体に溜まっていた電気が「スピアーに対して全力で攻撃」という俺の意思に従い一気に体の外に放出される。
その放出された膨大な電気量に俺自身も制御ができず暴走、蓄積されていた電気量と電気袋にある電気量が合わさり本来の技『雷』の威力を余裕で超えた高出力の電撃となってスピアーに直撃したのだ。
今思い出すとゾッとする。
あの時の電撃は、俺自身で制御ができていなかった。
雷の影響だったとしても言い訳にもならない。
そんな強力な電撃がもしスピアーじゃなくその近くにいたイエロー

に当ったらと考えると本当に怖くなる。

（今はまだ無理だけど、動けるようになったらまた電気の制御を練習しなくちゃな）

そこまで考えて、少し眠気が襲ってきた。
いろいろと考えて疲れたこともあり、その眠気に誘われもう一眠りすることにした。

イエローの家にやっかいになることはや2ヶ月。
あの時に負った怪我もすでに癒え、今では普通に走り回れるようになった。
……なんていうと怪我が治るまでかなり時間がかかったように思えるが、実際のところ怪我自体はあの後3日くらいで完治したわけだが。
こんなに早く傷が癒えたのはイエローの力のお蔭というのもあるだろうが、そこはこのポケモンという自己治癒能力が高い体だからということも理由の一つだろう。
ほんとすごいよなポケモン、人間だったらこうはいかないよ。

……まぁ、それはさておき、なぜこんなに長い期間やっかいになっているかなのだが、実はあの後イエローに俺の事情を話してしまったのだ。
突然何をと思うかもしれないが、これにはちゃんと理由がある。

まず、イエローなのだが彼女は見た目同様に9歳で、あと少しで誕生日が来て10歳になる。
そう、つまりポケモントレーナーとして認められ旅に出ることができるようになるということだ。
怪我が癒えるまで俺はイエローの部屋で世話になっていたのだが、ほんと優しい子で俺の面倒を一生懸命見てくれた。
それに伴い一緒にいる時間も多くなり、いろいろと話す機会も多くなったわけだが話していくうちに俺はイエローのお友達と認識されてしまったようだ。
だからかもしれないが、俺はイエローに一緒に旅をしないかと誘われたのだ。
一人旅ということに対して寂しさがあったのか、トキワの森でスピアーから守ったということが印象に残っていて俺と一緒にいることが心強いと思ったのかどうかはわからないが、俺としてはイエローのことは嫌いじゃないし、いろいろと面倒を見てもらった手前恩を返す意味でもその話に対してOKした。
それに、俺自身この世界を見て回りたいという欲求もあるし、俺自身なぜポケモンになってしまったのか、それが気にならないと言ったら嘘になるわけで。
この世界を回ったからと言って原因がわかるとは限らないし、元に戻れるなんて保証はどこにもないけど決してないと言い切れるわけじゃないし、それにもしかしたらという『当て』もある。
その『当て』の情報も、この世界を回ることで掴めるかもしれない。
……とまぁ、なんだかんだ考えてるけど実際のところイエローの誘いを受けて俺が答えるまでの間中、イエローが不安そうな目で俺を見つめていたことが俺の意思を決定させたようなものなのだが。
イエローにそんな目で見られたら、たとえ乗り気じゃなかったとしても思わずOKをしてしまったことだろう。
やっぱり、女の子は笑顔が一番です！
……まぁ、流石にまだモンスターボールに入れられることに対して

は抵抗があったためその旨を伝えボールに入らずについていくことにしたわけだが。
所謂サトシ君のピカチュウみたいな感じかね。

さて、一緒に行くことになったのはいいのだが一つ思い出してほしいことがある。
それはイエローの持つ能力、「ポケモンの意思を読み取り、ポケモンの傷を癒す」能力だ。
なぜか通常時にも普通に会話ができていることに疑問は覚えるが、今はさしたる問題はない。
問題があるのは、イエロー自身まだその力をうまくコントロールできていないということだ。
作中では普通に使っているその力だっただけに、そのことを聞いた時は小さい驚きを感じたが、はっきり言ってコントロールできていないということはいろいろとまずい。
まぁ、能力が能力なだけに某魔法先生みたいにクシャミで暴発なんかはないだろうけど、もし何かのはずみで能力を行使してしまい俺の過去の記憶に触れてしまったらどうなるか。
……いや、イエローの事だからなぜ今まで黙っていたのかと問い詰められたりそのことで関係がギクシャクしたりはしないだろうけど。
それでも、これから一緒に旅をする上で俺のことを知っていてもらっていた方がいろいろと協力をしてもらい易くなるだろうし、こちらとしてもいろいろと協力してやれることもあるかもしれない。

……とりあえず、俺がいる場所で着替えとかそういうのは控えてはもらいたい。

俺だって今じゃポケモンだけど心は人間の男なわけだし、イエローが子供だからって女の子なわけでいろいろと気まずいっつうの。
よく、二次創作とかで男の主人公が女の子の着替えるところを見てしまったとき何とも思わないということがあるが、俺には無理だ！
気まずいものは気まずいんだ！
子供に対して何変な感情抱いてんの？とかお前ロリコン？とかいうやつ、俺と変わってみろ、リアルにそんな状況になってそんなこと言えるんだった土下座でもジャンピング土下座でもスタイリッシュ土下座でもして謝ってやるよ。

と、まぁそんなわけでイエローに俺のことを話したわけだが、流石に話を聞いた時は何かの冗談だと思ったようだが、まぁそれは予想の範囲内だ。
そこでイエローに能力を使わせた。
言葉で信じられないなら、見てもらった方がいいだろう、俺の人間だったころの記憶を。
俺の記憶を見たとき、イエローは流石にびっくりしたような顔をしていたが、しかしこれでようやく信じてもらえたわけだ。
そして俺の目的である人間の姿に戻ることといつか元の世界に戻れるのならば戻りたいということ、この旅で『当て』の情報を探すことを伝えると、イエローは俺の目的を手伝うといってくれた。
ポケモンである俺だけじゃ集められる情報なんて微々たるものだろうけど、人間であるイエローの手を借りることができるならそれこそ俺では集めることができない情報を集めることができるだろう。

……しかし、イエローは本当にいい子だねぇ。

俺自身この話をしたらイエローだったら協力をしてくれるのではと思ってはいたけど、こちらから頼むより先に申し出てくれるとは。ここまでしてもらって感謝してもしきれないというのに、俺に返せるものなどそれこそたかが知れている。

（……せめて一緒にいる間、イエローに危害が及ばないように守れるようになろう）

そんな思いを背にイエローが旅立つ日までの間、俺は今日も増えて制御しにくくなった電気の制御に明け暮れるのだ。

『バチッ』

……あ、またミスった

九話（前書き）

お待たせしました、第九話。

ほんと、こんな文量しかないのに月一の投稿という……。

それでも私は頑張ります！完結目指して頑張ります！

それでは第九話、どうぞ。

九話

『おら、電気ショック！』

「オニュァアァアァァ！！！？」

俺は襲ってくるオニスズメに対し電気ショックを撃ち迎撃する。
以前の強化フラグでしっかりと強化していた俺の電気ショックは今
オニスズメくらいならばどうということはない……一匹ずつならば
な。

『あぁ、くっそ！なんでこんなにオニスズメの大群が襲ってくるんだよ！！？』

「そ、そんなのわからないよ！？と、とにかく早く逃げないと！」

俺とイエローは一番道路をダッシュで南下していた。
そもそもなぜ俺たちが今こうしているかというと、あれからさらに２か月が過ぎとうとうイエローが１０歳を迎えたのだ。
そのためポケモントレーナー許可証がはがきで届き、初めてのポケモンとトレーナーの身分証明ともなるポケモン図鑑を受け取るためマサラタウンにいるオーキド博士を訪ねることになったのだ。
そして、トキワシティを出て半日が経とうという時いきなりオニスズメの大群が殺気立って俺たちに襲いかかってきた。
てか、俺たち本当に何もしてないだろ、なんだあの殺気は尋常じゃなかったぞ！？
訳の分からないまま襲いかかられて訳の分からないまま俺たちは慌てて逃げ出した。

確かに俺は以前のパワーアップで電気の総量、出力ともに大幅に上げることができた。
その制御もこの数か月の間みっちりと訓練をこなしてきたためにそ

んじょそこらのピカチュウなんぞ目じゃないくらい上達もした。
以前の俺ならまだしも、今現在の俺ならばオニスズメ相手に早々遅れはとらない。
まぁ、それも相手が1匹2匹という少数ならばという話だが。
そもそもオニスズメは群れで行動をする習性があるとはいっても一つの群れでも大体5～6匹くらいだ。
だというのになんだあの数は、軽く見積もっても30は超えるぞ！？
しかもその全員が全員殺気立たせて絶対に逃がすものかという意思をありありと感じさせて襲ってくる。
あそこまでとなるとほんと俺たちの方が何かしたのではないかと思ってしまうが、はっきり言って俺たちは何もしていない。
となると、誰かほかのトレーナーに嫌な思いでもさせられたのかもしれないが、今までオニスズメの大群に襲われたというトレーナーの情報はなかった。
そういう情報は多少なりとも広まっていくものだというにもかかわらず一度も耳にしたことがない。
つまり、奴らは不特定多数のトレーナーを狙っているのではなくある特徴をしたトレーナーを限定してあそこまで執拗に襲っているということになるのだが、俺たちがそのどっかのバカをやらかしたトレーナーと何か共通点があるということになる。
一体俺たちとそのバカにどんな共通点が……そう考えたとき、はっと思い出した。

（も、もしかして！？）

俺はバッと顔だけを振り返ってオニスズメを見てみると、その怒り

の表情を向けているのはトレーナーであるイエローにもあるのだが、その大半は俺に向けられているように見える。
つまり、奴らの限定している特徴は俺、というかピカチュウを所持しているトレーナー。
しかも、ボールに入れているのでは判別つかないから恐らくボールの外に出して行動させているトレーナーを限定しているのではないか、そう予想するとおのずとあの怒り狂ったオニスズメ達が誰に対して起こっていたのか思いつくことができた。

『な、な、なに面倒くせぇこと押し付けてくれてんじゃあの主人公はぁぁぁぁあ!!!!!』

「ふぇ!?な、なに、どうしたの!?」

いきなり叫びだした俺にビクッとして見つめてくるイエロー。
それに俺はなんでもないといって返して、走りながらも自分の心を落ち着かせる。

（お、落ち着け、今はそんなことでどうこう言ってる場合じゃねぇ。ほんと面倒くせぇけど、今はこの状況を乗り越えねぇと！）

『ちっくしょぉ！やってやるわぁぁぁぁぁぁ！！！！』

「だ、だからどうしたの！？」

その後、執拗深く追い続けてくるオニスズメに対して電気ショックと時々十万ボルト、そんでもって広範囲の電磁波をぶつけるといったことを繰り返し、やっとのことでオニスズメ達を追い返すことに成功した。

その間ずっと走っていたイエローの体力はレッド状態、かくいう俺も体力面ではまだ余裕はあるものの休む暇もなく電撃を放っていた

ためすでに電気残量はわずか。
しかもずっと追われていたということで肉体的疲労以上に精神的疲労の方が勝っていて、もうこのまま眠ってしまえたらどれだけいいだろうか、そう考えてしまう。
しかし、このままここで野宿をしてはまたいつオニスズメ達に襲いかかられるかわかった者じゃなく、そう考えるとこんなところでおちおち休んでいはいられなかった。
幸い、かどうかは疑問に残るが必死に走っていたということもあり、歩いていたらあと1日はかかってしまうだろうマサラタウンの道のりがかなり短縮できた。
このままいけばあと数時間ほどで着くことができるだろう。
そのため、俺たちは悲鳴を上げる体に鞭を撃ちマサラタウンへの道を歩き続けた。

「……や、やっと……ついた、ねぇ」

『そ、そう……だな』

結局俺たちがマサラタウンについたのはオニスズメ撃退から4時間後。
空はすでに夕焼け空から真っ黒な夜へと姿を変えて久しい黄昏時。

「と、とにかく、まずはオーキド博士のところにいこ？」

『そうだな。マサラタウンには泊まるところほとんどないし、こんな時間じゃどこも空いてないだろうからできれば博士のところに泊まらせてもらえたらいいんだけど』

恐らくあの人ならば止まらせてくれるだろうと思いながら、俺たちは研究所への道を行く。
知識でしかないが、基本的にこの世界の人たちというのはなぜかとても良心的だ（悪の組織に属している人ら以外はだが）。
まぁ、子供向けの作品でもあるからある程度良心的な設定だったの

だろうけど……と、考えて止めた。
この世界は設定なんてそんなもの存在しない現実なのだ。
作品の事を考えながらこの世界に人たちに接するのは失礼すぎるし、
そんな考えでいたらいつか足元をすくわれかねない。

そして、そうこうしているうちにオーキド研究所と看板が立ててある大きな建物の前に辿りつく。
さっそくイエローが扉の前のインターホンを押すと、中から聞いたことのある男の声（まぁオーキド博士の声なのだろうが）が聞こえてきた。

「ほいほい、なんじゃ？」

そこに出てきたのは、人のよさそうな白衣に身を包んだ老人。

（……この人が、オーキド博士か）

「えっと、私はイエロー・デ・トキワグローブと言います。トレーナーになるためにここに来ました……えぇと、あ、あった……はい」

イエローはカバンの中から許可証たるはがきを取り出すとそれをオーキド博士に手渡した。

「……ふむふむ、確かに。あいわかった……しかし今日はもう遅い。その服装を見るに今マサラに着いたところじゃろ？この時間じゃもう宿は空いていないからのぅ、今日は泊まっていきなさい。要件は明日済ませるとしよう」

「え、いいんですか？」

「もちろんじゃ。ささ、中に入りなさい。今日は疲れたじゃろ？ちょうど夕飯の時間じゃし一緒に食べようかのぅ」

「えっと、何から何まで、すみません」

そう促され俺とイエローは研究所の中に入って行く。

「かまわんよ……ム、そのピカチュウは？」

二人が話している時、オーキド博士がようやく俺に気付いたように視線を俺に向ける。

「あ、この子は私のパートナーです！」

「はて、パートナーとな？しかし……ボールに入れてないようじゃが」

「はい。この子、ボールに入るのが嫌いで」

「ふむ、ボールに入るのが嫌いとな。これまた珍しい……事もないかのぅ」

どうやらオーキド博士はサトシのピカチュウの事を思い出したようだ。

あのピカチュウもボールに入るのが嫌でなんやかんやと主であるサ

トシともめた後、そのまま一緒に旅に出たのだ。
そのことを考えると、俺の事も珍しくはあるが有り得ないということではないのだろう。
……まぁ、あのピカチュウと俺の違いは捕獲されているかされていないかなんだけどな。
そういやぁ捕獲されていないポケモンでも一緒に旅をしていたら手持ちということになるんだろうか？

「あ、でも、この子は捕獲したわけでもなくて、でも私の友達で一緒に旅をすることになったんですけど、この場合手持ちって認められるんでしょうか？」

あ、イエローが俺の聞きたかったことを聞いてくれた。

「ふむ、一般的にはボールに入れられているポケモンを手持ちと言われているが、実はそれは少々違っていてのぉ。ボールはあくまでもポケモンを収納しておくだけの入れ物にすぎん。行動するたびに手持ちのポケモンが出て歩いていたら人の邪魔になるじゃろ？そのために開発されたのがポケモンを収納することができるこのモンスターボールじゃ。まぁ、ボールの機能に収納されたポケモンをそのトレーナーのポケモンと認識する機能がついているのは確かじゃが、捕獲していないから手持ちではないということにはならんよ。君たちは友達で、一緒に旅をすることに決めたのじゃろ？ならば君たちはもう立派なパートナーであり仲間でありそのピカチュウは君の手

持ちポケモンに間違いない」

ふむ、なるほどな。
ボールはあくまでもポケモンを収納しておくだけの入れ物に過ぎない、か。
そういえばロケット団のニャースもそもそもムサシの手持ちでもないというのにいろいろなコンテストに出場したこともあったな。
イエロー自身バトルはあまり好きじゃないからジム戦などはやらない可能性が大いにあるが、何らかのコンテストに出場しないとも限らない。
そして俺がそれに出ないということも限らないわけだから、捕獲されていないから手持ちじゃないといわれたらどうしようかと思ったが。
まぁ、いざとなったらイエローにならば捕獲されるのもやぶさかじゃないとだけは言っておこう……誰にだよ？

まぁ、とりあえず、いろいろと話はあるだろうが、それは明日に持ち越しとなった。
流石に俺もイエローも疲労がピーク、はっきり言って夕飯なんて食べずにそのままベッドにダイブしたいくらいだ。
まぁ、せっかく用意してくれるというのに食べないのは失礼だろう、博士は気にしないだろうが俺たちがする。

夕飯後、お風呂を借りて汗を落とした俺たちはやっとベッドに入ることができた。
やはり疲労がたまっていたのだろう、布団をかぶると強烈な睡魔に襲われたが俺たちはその睡魔に抵抗することもなく、そのまま眠りについた。

九話（後書き）

と、こんな感じで彼らの旅は始まりました。

……戦闘シーンもう少し頑張った方がよかったかなぁと思いながらも、逃げながらの戦闘じゃこんなもんですよねぇと、妥協。

これからの一対一のバトルが起きたときにでもまた頑張って考えます。

そして今回一番悩んだのは移動に関する時間。

彼らって、基本徒歩でカントー地方回ってますがその実際の移動にかかるる時間はかなりのもののはず。

マサラとトキワ間もゲームだと一分もかからず行けるのですがリアルに考えると徒歩じゃ数時間じゃきかないと思いますしアニメでは途中途中に隠れ里とか岩山とか荒野とかそんなのも入ってるからさらに悩むみます。

……ま、そこらへんはある程度適当でいいですかね（オイ

それでは、またいつか。

外伝2（前書き）

久々に読み返してみてふと、外伝の続きが頭に浮かんでしまいどうしようもなかった。

そんなわけで外伝の続きで投稿します。

外伝2

エリオ・モンディアル
Ｓｔｒｉｋｅｒｓ時、古代遺物管理部機動六課ライトニング分隊所属、階級は三等陸士。
１０歳という時点で陸戦Ｂという素質を持ち六課解散時までに陸戦ＡＡまでに至った才能の持ち主。
９歳時でＡＡＡ＋の素質を持っていた高町なのはと比べるとずいぶんと低いと思われがちだが、それは高町なのはが異常なまでに魔法の才を有していただけにすぎず、１０歳という時点でＢ、のちにＡＡランクまで至っているエリオは間違いなく才あるものとみて間違いない。
近代ベルカ式の魔導士で、魔力変換資質「電気」を保有する将来騎士を目指す少年。
正規の訓練とは別に烈火の将シグナムより訓練を受け、そこから学んだ剣技（エリオの場合は槍技だろう）や付加強化、さらにフェイトから学んだ高速起動と電気魔法などを駆使して戦闘を行う。
生来の生真面目さで素直な性格もあり教えられたことはスポンジに吸収される水のごとく吸い取り自らの力としていく。
優れた師に恵まれ、環境に恵まれ学び身に着けてきたのだ、元の才を考えてもＡＡに至ったことになんら不思議はない。
……そして、富豪モンディアル家夫妻の実子「エリオ・モンディアル」の人造魔導士（クローン）。

「まじですか、リリなのですか、エリオですか……そうですか」

以前はピカチュウとして、そして今度はエリオとして姿を変えてしまった。

これは一体何の因果なのだろう、電気繋がりなのだろうか？

ともあれ、こんなことが起きたのはやはりあのロケット団のせいであることに間違いはない、いつかボコす。

ミュウが行使した力によるものだから、暴走したとしても最悪死んだなんてことにはならないだろうから恐らく今の状況は以前のように姿が変わってしまっただけか、はたまた魂が抜けてこの体に憑依したのか。

たぶん後者な気がするが、だからと言って世界を超えたというわけではない気がする（ポケモンからリリなのへという作品においての意味で）。

これは以前から考えていたことだがいくらミュウと言えど漫画などの二次創作の世界へ現実世界の人間をいくら事故とはいえ連れてくることなどできないだろう。

そして、このリリなのの世界に来たということで俺の考えは確信に変わった。

恐らく数多くの次元世界の中、俺が元いた世界もあのポケモンたちの世界もそしてこのリリなのの舞台となる世界も存在しているのだ

ろう。
だとすると、いつかはわからないがもしかしたらまたあの世界に戻れるかもしれない、イエローがいる世界へ、仲間たちがいる世界へ。
離れてみて分かった、俺はあの世界が好きだ。
沢山のポケモンたちがいて沢山の不思議があって、そしてイエローがいるあの世界が俺は好きなのだ。
確かに元の俺のいた世界にも未練はある、だがそれ以上に俺はあのイエローたちがいる世界に帰りたい、そう思った。

まぁ、この世界には転移魔法もあるわけだし、移動手段は確保できるだろう。
いつか、そういつか必ず俺はあの世界に帰る、そう決意を新たに俺は……まず衣服を探した。
ポットの中にいたため俺自身マッパなことを忘れていた。

とりあえずこの研究所を荒らしてみると以前の研究員が使っていたものだろう部屋のクローゼットに残されていた衣服を失敬させてもらった。
白衣もあったのでそれも頂かせてもらった、これば別に何の意味もないのだがただの昔の憧れでしかない。
無いかな?昔学校に通っていた時理科の先生が来ている白衣をかっこいいと思ったことが。
俺はある、別に理科の先生になりたいなどと思ったことはないが、あの白衣は一度でいいから来てみたいと思っていたのだ。
白衣を頂いた理由など、その程度の理由でしかない。

衣類を身に着けた俺は先ほどの研究室に戻ってきた。
まず俺に足りないのはこの世界の情報、俺自身の情報。
言葉や文字はこの体の恩恵か問題ないようなので、残されていた研究書類を読み漁る。
にしても、残されている研究書類の数が少なすぎる。
こういう実験で出来る書類というのはもっと莫大な量になるはずなのに、ここにはＡ４用紙代の大きさの紙５，６枚しか残されていなかった。
まぁ、さっきあらかた荒らしたところによるとこの研究所にはもう俺以外の人はいないようだし、恐らく廃棄されたのだろう。
廃棄されたのならば書類が少ないということも理解できる、しかし普通はすべての書類を処分してからするものじゃないのか？
そう思うも聞ける誰かがいるわけでもない、俺は残された研究書類に目を通した。

その書類に書かれていたこと、それは有体に言うところの研究日誌のようなものだ。
しかも俺の体に関することや廃棄された理由などが乗っている部分だけを切り取って残したようだ。
ほんと、なぜこんなことをしたのか訳が分からないよ。
とりあえず、俺の体に関することを簡単に上げてみると……

・エリオ・モンディアルの人造魔導士である
・実験として体の強化に重きを置いていた
・今の実年齢は８歳くらい

・肉体の年齢を薬などで成長させ１６歳くらいとなっている
・身体能力は通常の約２倍、魔力総量ＡＡ＋、瞬間魔力放出量Ａ＋まで上げることができたそうだ
・魔力変換資質「電気」保有

……うぅむ、これなかなかに高ランクじゃねぇの？
確かエリオ自身の魔力量ってそれほど高くなかったんじゃなかったっけ？
確かＡかそれより少し低いくらいか？
そこら辺の詳しいことはよくわからんけど。
でも、この研究かなりいい線いってるよな？
これだけの強化ができたんなら成功もいい所じゃねぇのかな。
なんで廃棄なんてしたんだ？

・幼い時点での研究が精神に影響を与えたのか情緒不安定
・魔力が暴走しがちで暴走した時、魔力の放出量が制御できる地点を突破し電気変換資質を伴って周囲に被害をまき散らす
・その他暴走を抑える研究を行っていたがそのどれもが失敗に終わる
・研究費用、実験費用、修繕費用ｅｔｃ．．．がバカにならないところまで来たため、実験を凍結

……そりゃ、６歳児に非道な実験やり続けたら精神に異常をきたしてもしょうがないだろうに。
原作のエリオ、よく荒んだだけで済んだな。
まぁ、保護したフェイトやその周囲の援助あってのものかもしれないが。
しかし、今現在俺って暴走してねぇよな？
もしかしてあまりの現実にこのエリオの精神が死んじゃったとか？
だから俺がこの体に入ることができて、二つの魂と肉体との間で起きそうな拒否反応が起こらないとか？
……これもまたありそうでいやな気分だな。
そういやぁ、このエリオ魔力変換資質「電気」持ってるんだよな？

……えいっ

『バチバチバチ！！』

「おぉ、普通に使える。リリなの世界だから術式の構成だとかなんだとかあると思ったんだけど……あ、そうか魔力変換資質だから魔力をそのまま電気に変えてるだけだからそんなのいらないのか」

ならば

「おら、雷パンチ！」

電気が握った拳に集束される。
何の苦も無くそれをなすことができ、そしてそれを近場にあった机に向かってぶつける。
すると机は車にでもぶつかったのではないかという勢いで吹っ飛び、壁にぶつかるとそこで止まった。
何かの金属製であるにもかかわらず衝撃でボロボロになった机は雷パンチの影響か帯電していて時折バチバチと音を立てていた。

やっぱり、そう俺は思った。
過去ピカチュウの時に鍛えた制御能力が今も健在である。

確かにピカチュウの時に比べればいささか慣れないところもあるが、それもいつか拭えるだろう。
あれほど鍛えたのだ、身体が変わろうとも電気の使い方はすでに魂にまで刻まれている……とまでは言い過ぎかもしれないが使い方はもうすでに知っているのだ、あとは慣れるまでの問題だろう。

その後、俺は自分の体がどの程度動けるのかを調べるために研究所

の中でも広い場所、恐らく以前ここでいろいろと実験をさせられていただろう場所で試してみた。
ポットに入っていてしばらくは録に動けないだろうかと思っていたが、あの後いつの間にか普通に動けるようになっていた。
恐らく俺が浸かっていた溶液にそういう効果のあるものが使われていたのだろうと思う。

そしてある程度動いてみてわかったことなのだが、身体的な能力が通常より強化されているということらしいがそれでもピカチュウだった時と比べると格段に劣っていた。
まぁ、それはポケモンと人間という種族の壁があるからしょうがないか。
電気能力は、まだ不慣れだというところを除いてもあの頃よりは電気量は上だと思う。
今までは十万ボルトを撃つのに少なからずタメが必要だったが、この体だとそのタメにかかる時間がさらに少ない。
そして、十万ボルトを使用し続けてみるとピカチュウの時よりも5回ほど使用回数が多くなっている。
その5回分電気総量（というか魔力総量なのだが）が増えているということだろう。
そして、魔力を体に通しての強化とこの体の能力を合わせることでようやく以前の動きに追いついただろうかというくらいだった。

つまり

身体能力……以前＞現在
身体能力（魔力付加）……以前≒現在
電気能力……以前＜現在
制御能力……以前＞現在

こんな感じだ。
……戦力的には微妙に落ちてる気がするな。
まぁ、今となってはもうしょうがないとしか言いようがないか、使えるだけ儲けもんだと思わんとな。

俺の体のことについてはだいたいわかった、後はこの世界についてだ。
俺は実験室を出て先ほどの部屋に戻りそこで研究日誌に再び目を通す。
日誌というくらいなのだから日付もつけられているだろう、そう思ってのことだ。
そして見てみるとそこには新暦７１年と書かれていた。

「……て、ちょっと待て、そもそもこの日誌がいつかかれたのかもわからねぇじゃん」

とりあえず、ここに最後に書かれているのが新暦７１年、つまり今はそれ以降となる。
他に年号を調べることができるものがないか、部屋の中を探してみるとなんと都合のいいことか電子時計が壁に立てかけられていた。
その電子時計は誇りをかぶっていて最後に整備されたのがかなり前だとわかるありさまだったにもかかわらず、確かに今現在の時を知らせていた。
そしてそこに書かれている年度表記を見る。

「新暦７３年？　……えっと、確かｓｔｓ本編始まったのが新暦７５年くらいだっけ？」

見たのがかなり前だったからあやふやだが、大体そのくらいだろう。
つまり、原作が始まるまで約２年。
……まぁ、そんなのどうでもいいんだけどな。
別にどっかの二次創作みたいに「原作に関わってやる！」だとか「原作なんて死亡フラグばっかだ、絶対関わらねぇぞ！」だとかいうつもりは俺にはない。
自分が関わったからっていい結果を出せるなどと驕るつもりなど傍からないし、自分が関わって最悪な展開に陥る可能性もあるわけだからな。
それは置いとくとして、そもそもポケモンの世界でもそうだったが俺を動かしてる大半は好奇心だ、関わってそれが俺の好奇心を刺激するようなものだったら結果がどうあれ関わってしまうかもしれない。
まぁ、その時の流れに身を任せるってやつだな。

下手に関わる関わらないなんてやっても面倒なだけだし。
仮に関わるんだって言ってもいろんな二次創作のようにがっつくようにかかわって行ったらそれこそウザがられるし変な目で見られる、仮に関わらないんだって言っても極端に避けようとするとそれがフラグとなって関わっていくことになる、そう思うわけだよ俺は。

と、いうわけで目下の予定はあのポケモンの世界を見つけること、そしてそこに帰ること。
ポケモンの世界を探すそのついでとしてこの沢山の世界を見て回るというのもいいかもしれない。
姿かたちが変わっちゃってるけど、きっとイエローならわかってくれる、他の仲間たちならわかってくれる、そう信じている。
さて、これからどうしますかね。

それからしばらくした時、俺は思った。
いつまでもこの研究所に居続けることもできない、てか食料が全くない。
まぁ、当たり前なことだがこの研究所が破棄されてからかなりたつ、食料があるはずがない。
この研究所を荒らしまわったのだが、保存食もないしここがどこかわかるような地図もないし、二次創作でありがちな破棄されたはずなのになぜか使えるデバイスもなかった。
現実はいつだってこんなもんだよね。

結局俺は外に出ることに決めた。
電子時計を見るにちょうど8時くらいになる時間。
夜だったら考えるところだけど、朝だったら考える必要などない。
金なし、地図なし、飯なし、デバイスなしとなしなしずくしだけど、いつまでもここにいたら餓死してしまう。
幸い俺には電気技があるし身体能力も普通に比べれば高いし、戦闘経験だって半端じゃないくらい持ってる。
これが生身だったらどうしようもなかったが、しかし俺は戦うことができる、戦う術を持っている。
それこそ相手がSランクオーバーだとか理不尽な存在でない限りそう簡単に負けることはないだろう。
……まぁ、人間の姿での戦闘は初めてだしもしかしたら同ランクの奴相手にも苦戦する可能性がないわけじゃないけど。

出口につくとそこには大きな鉄扉があり鍵がかかっていた。
まぁ、研究所だからそれくらいあっても不思議ではないとは思うが、

こんな最先端な世界でなぜに鉄扉と思わなくもない。
ま、鉄扉の方が俺としては助かるがな、下手にデジタル機器だったらそんな知識のない俺では開けることは難しく壊す以外に案が出なかっただろうし。
俺は手を鍵のあるだろう部分にかざし電気を浴びせる。
そして数分後、『ガコン』という思い音とともに鍵が開けられる。
何をしたのか、それはある程度使える電気使いにとっては結構簡単なこと、電気を浴びせて疑似磁石を作り出し鍵を開けたのだ。
うん、鍵もちゃんと鉄製で出来ていてよかった。

俺は鉄扉を押しあける。
かなりの重量があるように見えるがこの体の身体能力に魔力の強化、それだけで十分に開けることができた。
そして、その外を見てみるとそこにはトキワの森程とはいかないだろうが、かなりの広さを誇るだろう森が広がっていた。
まぁ、こんな研究所町にあったとしても地下か、それか人目につかないような森の中しかないだろうけど、これは村または町を探すのにも一苦労だな。
そう、俺はため息を一つはきその広大な森に一歩足を踏み入れた。

その3日後、俺はやっとの思いで町や村とは言えない少し大きな集落を見つけることができた。
その集落を見ると文明レベルはインディアンを少し文化的にしたような感じだった。
機械の類はなく、そのすべては天然素材で作られていることが一目瞭然だった。
とりあえず、俺は早速その集落の人達と接触を行うことにした。
そこの人たちは俺の事をよそ者だといってさけたりすることもなく友好的で、俺の聞いたことにも面倒がらず丁寧に答えてくれた。
そこで知ったことは

・この世界の名前は第67統括世界ハーレス
・この世界でも魔法文化は存在している

……ん、統括世界？管理世界とか管理外世界とかじゃなくて？
話を聞いて浮かんできた疑問、それについて聞いてみたところ

・管理局ももちろん存在しているがここは管理局の勢力下には入っていない
・このハーレスはギルドの勢力下に収まっている

……ギルド？ギルドってあのゲームとかによく出てくるギルドの事か？

ギルド、正式名称『次元世界間依頼幹線局“ギルド”』
その創設は時空管理局が設立するよりも前に創設者ミカド・クサナギが設立した、その名の通り数々の次元世界から依頼を受け、それをギルド局員が選び仕事をこなすというもの。
依頼が次元世界単位なため、まず支部がない世界での依頼は連絡端末が配布されそれを通して本拠地である第1統括世界アスガルドに集められ、そこから依頼現場に近い次元世界の支部へと届けられそこからギルド局員が出動する、支部がある世界ではそのまま支部へと依頼を申込むという形式をとっている。
ギルド設立してはや数年、そのころになってようやく時空管理局も設立を果たした。
最初はそれほどでもなかったのだが、年々と両組織が大きくなるにつれ勢力圏も増えていきいざこざが生まれやすくなっていく。
そしてついには、時空管理局がギルドに解散し自分たちの勢力下にはいるように圧力をかけてきた。
もちろんそんな一方的な話に乗るギルドではなく、結局両組織間の全面戦争となってしまった。
当時では今のようなアルカンシェルなどという物騒な物や非殺傷などという便利なものがまだ開発されていなかったためそれこそ両陣営に多数の死者が出たそうだ。
長く続く戦いののち流石にこれ以上の被害を恐れたギルドが管理局に対して話し合いの機会を与えた。
与えたというとギルド側が上に感じられるが、実際その時流れがギルド側に傾いていたのだ。
それは若干ではあるがながい歴史を持つギルド故に数が勝っていた

ためか、はたまた創設者であるミカド・クサナギの手腕によるものか。
恐らくその両方であろうが。
実際数を比べてみてもギルド局員の人数の方が若干多くいたし、ミカド・クサナギの戦場での功績も目を見張るものがある。
そのことを管理局の人たちも理解していたのだろう、話し合いの場が持たれた時若干の反対もあったもののこれ以上の戦いはお互い、むしろ自分たちの被害が大きすぎ最悪管理局崩壊もあり得ると悟った者の根気強い説得のかいもあり、お互いの高官たちが話し合いの場に参加することとなった。

そこで両組織のいくつかの条例が結ばれた。
初めに管理局の勢力下世界を「管理世界」、ギルドの勢力下世界を「統括世界」と呼ぶ。
第一に両組織の勢力下世界で勝手に権力をふるうことを禁ずる
第二に両組織の局員はお互いの組織の承諾なくその勢力下世界に立ち入ることを禁じ、破った場合厳しく罰する
第三にギルド局員が依頼により管理局の勢力下世界に入らざるを得ない場合第二の条例を順守せずともよい
第四に管理局が追っている事件の容疑者がギルドの勢力下世界に侵入した場合第二の条例を順守せずともよい
第五に何らかの事故によりやむを得ず互いの勢力下世界に侵入してしまった場合第二の条例を順守せずともよい
第六に両組織の局員が発見したロストロギアの管理権は見つけ処置をした局員の属する組織が有する
第七に発見した次元世界を勢力下におく場合最初に発見した組織がその権利を持ち、その勢力下世界の情報は必ず組織間で共有すること

その他にもいろいろと細かい条例が結ばれたようだがこれらの事柄が主となるもので間違いない。
そのようなことがあり、今この次元世界は時空管理局と次元世界間依頼幹線局ギルドの二つの組織の勢力下にある。

「……てか、そのミカド・クサナギってもしかして所謂転生者とかじゃね？」

その話を聞いて初めに思ったことがそれだった。
いや、確かにこの世界がリリカルなのはの世界に似ている世界だとしても全てが全て同じとは限らないことを俺はあのポケモンの世界で知ったはずだ。
それでも、俺という例がいるわけだし転生者、転移者、憑依者というたぐいの存在がいないとも限らない、てかきっといる一人二人なんて数じゃなくそれこそ数十数百っている。
どこまで二次創作と同じなのかはわからないが、流石に神に力をもらってとかは無しにしてほしいものだ。
我様な英雄王の宝具の雨なんて俺絶対よけれねぇよ、某僧兵さんの必殺級の概念が籠った一撃なんて避けれる幸運持ち合わせちゃいねぇよ、他作品と他作品の能力合わせてもらってんじゃねぇよ、神に匹敵する能力なんてもうお前神じゃん勝てるわけねえっつうの！

……とりあえず、そういう作品に似た世界っていうのはあるかもしれないということを念頭に置いておこう。
備えあればっていうけど、結局のところ俺のできる力ってピカチュウの時に使ってた力だからね、人間になって魔法使えるようになって引き出し増えるかもしれないけどそういうやつらに対しては焼け石に水みたいなものだしな。
ほんと、そういうやつら相手なら伝説のポケモンクラスの能力じゃなくちゃ相手にならねぇっつうの。

と、いろいろと愚痴ってもしょうがないのでひとまずここは脇に置いておくことにした。
そしてとりあえず、俺はそのギルドというところに行ってみることにした。
もちろんそこに入るために他ならない。
管理局は？　と考えるとやっぱり組織っていうのって結構面倒だと思ってなぁ、それに配属とかなんかあっていろんなところ見て回る機会少なくなっちまうしなぁ。
ギルドだったら話に聞くところによるとソロ（つまり個人で）で受けることもできるそうだしソロが難しかったらパーティ（つまり複数で）で受けることもできるそうだ、もちろんその場合一人分の報酬も減るけど。
そう考えると、周りを気にせずソロで依頼を行いいろいろな所へ出向くことのできるギルドの方が好奇心で動くきらいがある俺にとっては都合がいい気がするのだ。
どうやらこの世界にもギルドの支部が存在しているということらしいので早速いってみることにした。

で、着いたはいいのだが

「……でけぇなぁ」

そう、ギルド支部という割にかなりでかいのだ。
外観からして東京ドーム並か下手したらそれ以上ある気もする。
そういえば聞いた話によるとここは「ハーレス」支部というこの世界の支部、つまりこの世界に複数支部があるわけでなくこの世界にここ一つしかないわけか。
なるほど、確かにそれならこれほどの大きさなのも理解できる。
よく創作物にでてくるギルドというのはその村々に存在する村一つのギルドだからこそ小さくても問題はないのだ、しかしここはこの世界唯一のギルド支部。
一つしかないということはみんながここに集まるというわけだし、下手に小さい建物だと人が混雑して利用者にとっては利用し辛い状況になるし、支部側も利用者の対応についていけなくなる。
しかも、この世界の周囲の世界にも支部が存在しないギルド勢力下の世界が複数存在するわけで、そういう所の人は支部が存在するこの世界のようなところに集まったりすることもあるわけだが、そうなるとなおのこと建物が小さくては収まりきるはずもない。
そう納得すると俺は支部の中へと入っていく。
やはりといったところか中にはかなりの人がいた、混雑しているほ

どというわけでもないけどな。
その中にいくつか強い力を感じるが、それがいわゆる高位ランク者というやつなのかもしれない。
ま、だからどうしたというわけでもないのだが。
俺は複数ある受付の内ちょうど開いたところを見つけそこに向かった。

「次元世界間依頼斡線局ギルド、ハーレス支部へようこそ。今日はどのようなご用件でしょうか？」

受付に行くと２０代半ばな男が声をかけてくれた。

「えと、俺ギルドに入りたいんだけど、何か特別な試験とかってあったりしますか？」

「あぁ、入局希望者ですね？　いえ、特に試験はございません」

それを聞き少し安心する。
てか、いきなり試験なんてあったら絶対落ちてたぞ、魔法の知識と

かデバイスの知識とかそういうのよく知らねぇし。

「それでは、こちらの用紙に必要事項をご記入ください」

そういい、受付の男は一枚の紙を渡してくる。

・氏名

……どうしよう、普通に本名でていいのかな？
でも、イエローと一緒にいるときはイエローにあだな考えてもらったんだっけ。
イエローは俺の本名の方がいいんじゃないのかって言っていたけど、その時俺はピカチュウだったからなぁ。
俺の本名は元の姿に戻った時、その時に読んでもらいたいそう言ってつけてもらったんだっけ。
でも、流石にこの姿であのあだ名はちょっとはずいし……。
などなどといろいろと考えた結果

・指名
マース・エレクトロ

ネズミの英訳マウスをもじってマース、電気の英訳エレクトリックをもじってエレクトロ、つまり電気ネズミポケモンピカチュウを指す。

……ネーミングセンスないとか言ってくれるな、自分でもわかってるから。

とりあえず次だ。

・特技、能力、ランク等
・魔力変換資質「電気」
・魔力ランクＡＡ＋
・魔導士ランク不明

こんなもんか？

次は

・経歴

……これは

俺の経歴ってつまりこの体、人造魔導士としての経歴って事だろ？

「あの、すみません」

「はい、なんですか？」

「えっと、プライバシーの義務に関わることだったら答えてくれなくていいんですけど、あの、人造魔導士ってこのギルドにいたりしますか？」

この聞き方なら俺自身が人造魔導士に対して何か思うところがあるというように聞き手には取られるだろう。
だがまぁ、俺のことがばれるとかじゃないから大丈夫か。

「人造魔導士の方ですか？　えぇ、おりますよ。流石に誰がそうかはそれこそプライバシーの侵害になりますのでお教えすることはできませんが」

なるほど、ここでは人造魔導士だからと言ってそれほどひどい扱い

を受けはしない、と。

「このギルドには様々な事情を抱えた方が入局されます。それこそ人造魔導士だったり、種族的な問題で他に迫害されたり、管理局での職務についていけずにやめてこちらには入局される方もおります。もちろん、偽りの経歴を並べ犯罪者が入局しようとすることもありますが、我がギルドはすべての局員をしっかりと調査し、信頼できるかどうかを判断してから入局させます。なので経歴部分には嘘偽りなく書いてくださるとこちらとしても無用な手間をかけずに済むのですが」

……ちゃんと見ていたっていうのか、俺が経歴のところで考え込んでいたところを。

ギルド、なかなかにいい人材がいるみたいだな。

「基本ギルドはどのような事情の方でも差別なく受け入れます。犯罪を犯した方でも、しっかりとそれを償った後でならば受け入れることはできます。我らギルドのモットーは“信頼を大事に”です。それは依頼者との信頼関係に重きを置きますが、局員同士にも言えることなのです。同じ局員同士、仲間同士、メンバー同士を信頼できず依頼者との信頼関係など結べません。それが、我らがギルドの創始者ミカド・クサナギの意思です。まぁ、全ての入局している人たちが同じ考えかどうかはわかりませんが、私はその意思に賛同しています」

「……そう、ですか」

信頼関係、それは俺だって望むところだ。
流石に内部でいがみ合うようなところにはいたいとは思わない、居心地が悪いからな。
とりあえず、下手な経歴詐称はこっちの不利になるだけか。
そう思い、嘘偽りなくそこに記入する。
その他にもいろいろと記入するところがあったが、滞りなく進んだ。

「……はい、確かに……この魔導士ランク不明というのは？」

その記入した用紙を受け付けに渡すとそれ見て確認したのちにそう言ってきた。

「いや、俺そこにも書いた通りの経歴なんで魔力ランクは知ることはできましたけど、魔導士ランクというか、戦闘ランク？　そんな感じの奴はわからないんです」

「なるほど……はい、わかりました。魔導士ランクに関しましては日を改めて測定をするということで構わないでしょうか？」

「はい、お願いします」

そういうと、受付の人はキーボードをたたいて何かの作業を始める。恐らくだが、俺との会話の時に嘘発見器（魔法的な）のようなものが使われていて、その結果を調べているか、またはただ単に俺の情報を記入しているだけか、もしくはその両方か。

「はい、登録が完了しました。これであなたも正式にギルド局員の仲間入りです」

そういうと、一枚のカードのようなものを取り出し俺に渡してくる。

「このカードはあなたの個人情報を記録したデバイスです。これは記録されている当人にしか使用することができず、さらに所持者から一定の距離が離れたら自動的に転送され所持者の元に戻ってくるため盗難にあったり悪用されたりする心配はございません。機能と

しましては身分証明にも使用できますし、何らかしらの依頼を受ける際の受付カードとして使用されます。依頼を受けた後、詳細がそのカードに記録されますのでいつでも確認することができますし、依頼が達成したら自動的に記録されますのでそちらの精算窓口でそのカードを提出していただければ依頼終了が確認され報酬が支払われます。なお、そのカードは財布としての機能もございますので支払われた報酬はそちらに入金されます」

なるほど、それは便利だ。
てか、一つ一つのデバイスに転送機能がついてるって、明らかに原作よりも技術が進んでるよな？
これはギルドだけの技術なのだろうか？

「それでは、知っているかもしれませんがギルドに関して説明させていただきます。我がギルドはこの次元世界の勢力下世界で依頼者の依頼を受け活動しています。仕事内容は子供の世話や清掃活動から要人の護衛や町や人々に被害を与えている魔法生物の討伐依頼など様々です。しかし、最初に入局された方には要人の護衛などの重要性の高い依頼はお任せできません。入局されたばかりで無名、つまり功績がない者に任せて失敗でもしたらそれこそギルドの威信にかかわります。なので、ギルドでは功績でＳ、ＡＡＡ、ＡＡ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄと７つのランクに分けられています。このランクは先ほど渡したカードにも記録されていますので後程ご確認ください。ランクを一つ昇格させるためには１０の依頼を達成して初めて昇格の機会を得ます。試験内容は今自分のいるランクの一つ上のランクの依頼を一つこなしていただきます。もちろん、一度でも失敗をして

しまえばまた初めからやり直しです。ちなみにまだ先でしょうが教えておきますとAランクからの試験には上位ランク者が試験管として同伴して試験を行います。Aランクからの依頼は危険度が一気に高くなるため下手をすれば死亡する危険性もあります。これは試験管という役割のほかに有望な局員を減らさないための配慮でもあるのです」

ランク分けが7つしかないのか。

上がSまでしかないということから、もしかしたら管理局のランク付け以上に厳しい基準があるかもしれないな。

「続いて、ギルド内の施設についてですが、ギルド内には各世界へと向かう転送ポートが存在します。使用は自由ですので依頼があった際や用事があった際にでもそこを利用してください。そちらのカウンターは先ほども言いましたように精算窓口で依頼の終了後に確認と報酬の支払いがされます。続いてそちらのカウンターですが、そこではデバイスの販売、修理などを受け付けています。カタログもございまして買いたいものがありましたら取り寄せることもできますし、少々値は張るでしょうが特注することもできます。あと、いろいろな技術を教導管から学ぶ教導施設や模擬戦を行う施設などもあるのですが、これは第一統括世界アスガルドのギルド本局のみとなります。と、簡単ではありますが私からの説明は以上となります。何かご質問はございますか？」

一度に説明されたから頭が少しこんがらがってしまっているが、よくある二次創作と似たような内容だったのでそこまで気にすることはないだろう。
本局というところにはいつか一度行ってみようかな。

「えっと、実際にＡランク以上の人って何人くらいいるんですか？」

「そうですね、Ａランク以上の局員ですと約１０００人ほどですね。もう少し細かく分けるとＡランクが約６００人、ＡＡランクが約３００人、ＡＡＡランクが約８６人、そして最高ランクであるＳランクが１４人です」

「１０００人……ですか」

そりゃ多いなぁ、ランク付けが管理局以上に厳しくさらに依頼の難易度が増すはずのＡランク以上がそんなにいるとは。

「……多い、そう思いますか？」

「え、えっと……はい、まぁ」

「そうですね、数字の上で見ると多いように思います。ですが、私たちギルドの勢力下にある世界は３０８世界、単純計算で一つの世界３，４人Ａランクオーバーの局員がいることになるのですが、依頼の数は次元世界単位なわけですのでそれこそ数千数万と数えきれないほどあるのです。まぁ、Ａランク以下の局員も多くいるのですが、それでもＡランク以下の実力では難しい依頼も多くあります。そして今後もまた統括世界が増え続けていくだろうことを考えると、Ａランクオーバーが約１０００人というのは少し少ないと言わざるを得ません。まぁ、私たちギルドは管理局ほど勢力圏を増やすことに躍起になっているわけでもありませんのでそれほど人員不足に悩まされているわけでもありませんが、全く悩まされていないといえば嘘になるのです」

なるほど、俺は一つの世界でＡランクオーバーが１０００人と考えてしまっていたようだが、ここは無数と言えるほどの次元世界が存在する世界。
そう考えれば１０００という数は確かに少ない。

「さて、他に何かありますか？」

「……いえ、とくには」

「そうですか、それではこれから頑張ってください……あ、そうそう、言い忘れていましたが、Ｓランクになりますととある大会に出場できる権利が与えられます」

「大会？権利？」

「はい、それはこのギルドが主催する４年に一度行われるギルド内において強者を決める大会です。今現在Ｓランクを保持している人は数百万のギルド局員中１４名。その中からその大会を勝ち抜いた上位６人、この６人をギルド最強の６人として六神将の称号が与えられます」

六神将……って、どこのテイルズ！？

ここの創始者、ぜってぇそういう知識豊富だった奴なんだろうな。

「ただ、今現在の六神将がその地位についてからこれまで八年間、二度の大会が行われ今までで移り変わりが多かったはずの六神将の地位が変わることがありません。それだけ、今の六神将の力が同じSランク保持者の中でも別格だということでしょう。あなたもSランクをめざし、その先にあるギルドの頂点六神将を目指して頑張ってください」

六神将、確かに一人の男としては最強の称号とかっていうのはかなり魅力的だ。

だけどまぁ、目指す目指さないは今は保留でいいだろ。

とりあえず、こうして俺のこの世界での職場が決定したわけだが。

さて、まずは何しようかな。

十話（前書き）

遅くなりました。
待っててくれた人はお待たせしましたです。
……マジでリアルが忙しい今日この頃。
あぁ、卒論なんてなくなればいいのにと嘆きながら、卒論&就活で忙しいのにｓｓなんて書いているネメシスです。
それでは、本編をどうぞ。

十話

翌朝、といってもどうやら昨日の疲れのせいか昼近くまで寝ていた俺とイエローだった。
慌てて起きた俺たちはそのままオーキド博士のところに向かった。
ちなみにイエローの着ている服はオーキド博士たち研究者が着ている白衣を子供サイズに小さくしたもので、前のボタンがすべて閉じられている状態のものだ。
昨日までイエローが着ていた服は汗と汚れがひどかったためオーキド博士の助手（女性）が洗濯をしてくれたためだ。
大人の人の服はここが研究所であるため助手たちが泊まり込むこともよくあるので予備は置いてあるが、流石にイエローのような子供のしかも女の子用の着替えなど置いてあるはずもない。
しかし、研究用の白衣は別だ。
何度も言うがここは研究所、それもポケモン研究の権威であるオーキド博士の研究所だ。
そのためトレーナーズスクールの初等部、中等部、高等部問わず生徒たちが授業の一環として年に何度か見学または研修に来ることもある。
その時にその生徒たちに研究者の気分を少しでも味わってもらうためにサイズの大きいものから小さいものまで白衣が揃えられているのだ。
その一着をイエローは借りているというわけだ。
……下着？　……聞かぬが紳士の嗜みじゃないかな？

「お、オーキド博士、おはようございます！」

『おはようございます！』

「おぉ、おはよう。よく眠れたようじゃな」

「は、はい。すみません、こんな時間まで寝てしまって」

「なぁに、子供は寝て育つものじゃ。それに昨日の疲れもあったんじゃろう、気にすることはない」

そういい、オーキド博士は朗らかに笑う。

「イエローちゃんおはよう。昨日の服、もう乾いてるわよ。着替えてきて、それからそろそろお昼時だしお昼にしましょ？」

一緒にいた助手の人がイエローに声をかける。

「はい、ありがとうございます」

イエローが着替えてくるのを待ちオーキド博士やその助手たちと一緒に昼食をとる。

俺はポケモンフーズだが、流石はオーキド博士の研究所といった所かポケモンフーズがうまい、いい材料を使ってるようだ（勘だけど）。

しばらくして昼食も終わり、オーキド博士が話題を切り出した。

「さてイエロー君、一日遅れてしまったが今日から君もポケモントレーナーとしてスタートするわけじゃ。じゃからして、まずはポケモン図鑑とモンスターボールを上げよう」

そういい、ポケットの中から真っ赤な板状のものポケモン図鑑と小さい状態のモンスターボール６つを取り出しイエローに手渡した。

「その図鑑はトレーナーとしての証明書代わりにもなるから決して無くしてはならんぞ？」

「はい！」

元気よく返事をするイエローにオーキド博士も笑顔を浮かべうむうむと頷いている。

うん、流石イエローだ、早くもオーキド博士のイエローに対する好感度を上げたようだ。

まぁ、どんな仏頂面な初対面の人でもイエローの純粋な笑顔の前には気を許し頬を緩めてしまうだろうがな！

「そして、肝心のポケモンなんじゃが……」

と、そこまで行っていったん区切る。

なんだろう、先ほどまでと違い若干言いにくそうにしている。

「……実は先週新人トレーナーがちょうど3人来てのぅ、新人用の3匹を連れて行ってしまったのじゃ。じゃから、残念ながら今ここに君に渡せるポケモンはいないんじゃよ」

あと2，3日の内に新しく3匹が届く予定なのじゃが、というオーキド博士。

流石にサトシ達４人がマサラを発ったのはもう2ヶ月以上も前だったからサトシの時のように3匹がみんないない状況はないかなぁと思っていたらこれだ。

まぁ、そりゃその年の１０歳の誕生日を迎える人数が４人だけとい

うことはないだろうが、流石に3匹ともいない時にイエローが出くわすとは何という偶然だろう。
当のイエローはどう思っているのだろう、そう思ってイエローの方をうかがってみるが別段気にした様子は見られなかった。

「そうですか、それじゃ仕方ありませんね」

「すまんのぅ、なんならもう2，3日泊まっていかんか？」

「あぁ、いえ、別に気にしないでください。そういう事情じゃしょうがないですし、それに私の初めてのポケモンはもういますから」

そういうと、俺の方に視線を向ける。
初めてのポケモン、つまり俺事ピカチュウだ。
まぁ、確かにイエローの最初のポケモンは俺ではあるんだけど、最初の三匹がもらえないというのはトレーナーとしては残念ではないのだろうか。

「……そうか、君がそれでいいというならわしは何も言わん。見たところそのピカチュウも君にずいぶん懐いているようじゃしいいパートナーになるじゃろう」

「はい！　私たちは最高のパートナーです！」

『……あぁ、そうだな』

……イエローや、そのまぶしい笑顔で「ねっ！」と俺に向けないでくださいな、恥ずかしくて顔を直視できないじゃないですか。
そしてオーキド博士、そんな俺たちを見て意味深にうむうむと頷くのは止めてくれ。

と、まぁそんなこんなでようやく目的を果たした俺達は暗くなる前に出ようとオーキド博士やその助手たちにお礼をかねて挨拶をして研究所を出た。

『……なぁ、イエロー』

「ん、なぁに？」

『ほんとによかったのか、ポケモンもらわなくて。オーキド博士もいいって言ってくれたんだしあと2，3日くらい泊まって待ってもよかったんじゃないか？』

「ううん、いいの。私本当に気にしてなんかないよ？それにオーキド博士がいいって言ってくれてもやっぱり悪いよ、オーキド博士だって研究で忙しいだろうし」

『……まぁ、そりゃそうだろうけどさぁ』

「それに私、2番目に一緒に旅をする友達はもう決めてるから」

『え、どいつ？』

「ふふ、会ってのお楽しみね」

『そっか、それじゃ楽しみにしておこうかな』

お楽しみと言ってはいるがきっとそいつは俺も知っているポケモンなんだろうな。

ていうか、大体の予想はついている。

イエローが友達と言い2番目に連れて行きたいというほど仲のいい

ポケモンと言ったら、ねぇ？

「それじゃ、行こっか……“ミオ”！」

『……あぁ、行こうか……イエロー！』

お互いに呼び合い俺たちは最初来た道を逆に歩きだす。

“坂井弥央（さかいみお）”、今更になるがこれが以前の俺の名前だ。

これからもイエローを守るため、日々精進するからみんなよろしくな！

……てか、俺はいったい誰に挨拶してんだろう。

「ミオ、どうしたの？　早くいこうよ！」

『あ、あぁ、わかったよ！』

「ふむ、行ったか。しかし、ボール嫌いのピカチュウか。ピカチュウもそうじゃがイエロー君も含めてあいつ等にそっくりじゃったな」

そういいオーキドは以前研究所から旅立った一人の少年サトシとピカチュウを思い出す。
確かに最初サトシはピカチュウに電撃を浴びせられていたが、元々サトシはポケモンに好かれやすい。
まだサトシが小さいころ、時々研究所に遊びに来ては研究所のポケモンと遊んでいるのを見たことがある。
恐らくポケモンもサトシのポケモンが大好きだという想いを感じ取り、自然と心を許せる存在だと感じたんだろう。
以前トキワシティについた時サトシが連絡をくれたがその時にはすでにピカチュウとは仲良くなっていた、少々気難しいところがあるあのピカチュウがである。
この短い期間の中でピカチュウはサトシの想いを感じとり心を許せるようになったのだろう。
そして今回トレーナーになったばかりのイエローだが、まだ会ってそれほど時間が経っていないというのに、イエローがとても優しい子だということを感じ取ることができた。
それは近くにいたピカチュウを見ても明らかだろう、あの慕い様は長年共に歩んだトレーナーとポケモンを彷彿させる。
もしかしたら、サトシと同等かそれ以上にポケモンに好かれやすい存在かもしれない。
そうオーキドは、旅立ったばかりの新人トレーナーたちに思いをはせる。

～一方そのころのサトシ達～

十万ボルトをピカチュウにおぼえさせることに成功したサトシだが、それでもニビジムでのバトルはギリギリのバトルだった。
最後にスプリンクラーを利用しなければもしかしたら一度目と同じようにイワークに負けていたかもしれない。
しかし、そんなこんなで勝利を収めることができたサトシは旅の連れであるカスミにさらに元ニビジムのジムリーダータケシを仲間に加え次の目的地ハナダシティに向かうため、その途中にあるおつきみ山に向けて歩いていた。

「そういえばサトシ、お前って1番道路通ってきたんだよな？」

歩いている途中、何やら新聞のようなものを読んでいたタケシがふと話しかけてきた。

「あぁ、そうだけど、それがどうかしたのか？」

「いやな、一番道路でオニスズメの大群がトレーナーを襲ったって

いう記事を見つけてな、サトシは大丈夫だったのか気になっただけさ」

「……あぁ、オニスズメの大群かぁ。あの時は大変だったなぁ」

「え!?　ってことは襲われたのかサトシも!?　よく無事だったなぁ」

「全然無事じゃなかったぜ?あの時はまだ駆け出しだったからろくに戦えもしなかったしピカチュウもボロボロになっちゃったしで大変だったけど、何とかに撃退することができて助かったよ」

「あの時は?　い・ま・も、じゃないの?」

「う、うるさいなぁ!　俺だってあの時よりは成長してるんだから、今襲われたって絶対に返り討ちにしてやるぜ!　なぁ、ピカチュウ!」

「ピッカ、ピカチュウ!!（あぁ、もちろんさ!!）」

「その自信は一体どこから来るのやら」

カスミはそういうとハァっと溜息を吐く。
確かにサトシは確実に強くなっているし手持ちポケモンもピカチュウを筆頭にここいらのポケモンでは早々負けないくらい強いだろう。だが、サトシのお調子者な性格ゆえか、勝ち続けるとバトル中でも油断して返り討ちに会いかねない。
本当に見ていて危なっかしいお子ちゃまだ、そうカスミはもう一度溜息を吐く。

「まぁまぁ、二人とも落ち着けって。本当に仲がいいな二人は」

「「どこが仲がいいんだよ（のよ）！！！」」

一々息の合う二人である。

そういうところだって、という言葉はさらに火に油を注ぐようなものだと思いタケシは心の中でつぶやき口に出すのはやめておいた。

「でも、相手が飛行タイプで今より弱いって言ってもこのピカチュウだったんだろ？　それなのにボロボロになったっていうことは、それだけ数が多かったって事か」

「え、あぁ、そうだな。どれくらいかはわからなかったけど空一面にオニスズメの大群がいたからな」

さっきまで返り討ちにすると大見得を切ったサトシであるが、その時のことを思い出す寒気を覚えてしまう。

それくらいその時の光景は鮮烈に脳裏に焼き付いているのだ。

「ふぅん、ってことはこいつ等はかなり強いってことか」

「「え？」」

タケシの言葉に二人はまたも同時に声を上げる。

それと同時に二人そろってにらみ合いプイッと顔をそらすのだが、それをタケシは見ないふりをして話を続ける。

「ほら、これ見てみろよ」

そういい、自分の見ていた記事を二人に見せる。

そこに書いてあったのは

≪一番道路にオニスズメの大群現る！？
一人のトレーナーと一匹のポケモンが見事撃退！！≫

という大きな見出しで書かれた記事だった。
そこには文だけでなく上空から撮影されただろう一人のトレーナーと一匹のポケモンがオニスズメの群れから逃げつつ迎撃をしている写真だった。
一人は女の子のようで写真の角度から顔が見えないが、この特徴的な形に使用している技からいってポケモンの方はピカチュウだとわかる。

「へぇ、すごいじゃん。一匹だけでこれだけの数を相手してしかも撃退までしちゃうなんて」

「お、俺だってオニスズメを撃退したぞ！」

「ピッカァ！（そうだ！）」

「いや、あんた等の場合ボロボロになって運よくって事だったじゃない。見ればわかるでしょ、この子たちほとんど無傷じゃない？」

「う、うぐぅぅぅぅ！！！！」

「ビ、ビガァァァ！！！（う、うぐぅぅぅぅ！！！）」

「ま、世の中の広さが少しはわかったんじゃない？　同じ一匹でもあんたとこの子じゃ全然違うわけよ」

「ちっくしょぉぉぉ！！！　いつかこいつらとバトルして絶対勝ってやる！」

「ピッカァァァ！！！（負けないぞぉぉぉ！！！）」

本人たちの知らないところで主人公からライバル認定されてしまったイエローとピカチュウであった。

「ま、返り討ちに合わないように精進なさいな」

熱く燃え上がっている二人にさらに油どころかガソリンをそそごうとしているカスミに今度はタケシが溜息を吐く。

「……まったく、二人ともいい加減落ち着きを持たないと、旅は長いんだし途中で疲労で倒れるぞ……ほんとお前らは俺がいないとダメなんだなぁ」

と、なんだかんだとこんな二人をほっておけないタケシはやはり性別を間違えて生まれてきてしまったに違いない。

これで女だったらきっといい嫁になるだろうにと、これは我らが主人公ミオのタケシを見て思った事の内の一つである。

ちなみに、タケシが読んでいた記事は「ニビ速報」という、ニビシティとその周辺の面白そうな出来事をマッハのスピードで飛ぶことができるピジョットにカメラを取り付けて即座に発見後撮影&録画をして作成され、不定期に報道されるニビ新聞社の号外記事である。

その担当記者のモットーはマッハのスピードで駆け抜け珍騒動珍事件のネタを誰よりも早く仕入れ報道するということで、この新聞のお蔭で早期解決された事件も多いという。

……ま、これがこの物語に関わって来るかどうかは知るところではないが。

主人公紹介

・主人公

ピカチュウ（愛称：ミオ）

人間時の名前：坂井弥央（さかいみお）

主：イエロー・デ・トキワグローブ（ボールには入っていない）

・経歴

主人公は小学校6年時にポケットモンスター（赤）を購入しプレイし始める。

友達に紹介されアニメの方を見始めたのは中学に入学した当初、そのころになって主人公はポケモンの世界に引かれてのめりこんでいくようになる。ゲーム&テレビ含めて一番好きなポケモンはピカチュウ、一番好きなカップリングはサト×カス（シリーズが進むごとにカップリングは変わっていく）。

中学を卒業し高校に進学するころになるとポケモンを卒業して新たな趣味にはしっていく友達が数多くいたが、それでも主人公はポケモンにはまり続けた。

だがのめりこみすぎて周囲との関係が気づけていないことに多少危機感を覚えあまり忙しそうでない茶道部に入部。

週に3度という活動ペースだったため趣味に割く時間をとられることもない。

そのため部活にはほぼ毎回顔を出していたのでそれなりに部活内での関係を築くことに成功させる。

花の青春時代、自分の趣味に部活にと勤しんでいた主人公、中学からの友達に彼女ができたと聞き腹が立つも今の生活に不満もないため結局恋愛事とは無縁で高校を卒業する。

卒業時、茶道部に所属していた後輩が告白してきたが、突然の事でパニックに陥り「君があと5年たって、それでもその気持ちに変わ

りがなかったなら付き合う」そう言って早足で彼女のもとを去る。
それから2年ほどたちある友達のつてで、その時告白してきた彼女が今は別の男と一緒になり幸せに過ごしていることを知る。
「……所詮そんなもんさ」そう主人公は言い一人酒を飲みながらポケモンの映画を全巻通して観ていたようだ。
そしてその翌日、主人公はトリップした。

・ステータス（リリなの形式）
ピカチュウ（リオ）
攻撃力：B
防御力：D
特攻力：A－
特防力：C
素早さ：A＋
総電気量：AA
戦闘ランク：B

ピカチュウ（サトシの）
攻撃力：B
防御力：C
特攻力：A＋
特防力：B
素早さ：A＋
総電気量：A＋

戦闘ランク：A－

※1、このステータスは作者の想像の産物であり絶対にこの通りというわけではありません。

※2、戦闘ランクはステータスからくるおよその強さであり、ランクが高いからと言って絶対的に強いというわけではありません。その時々で運も絡んできますし、このステータスに現れていない個人個人の技術面での問題もあるためです。

11話（前書き）

今回も何気に1月ほど空いてしまった。

次は一体いつ投稿できるのやら。

待っていただいた方はお待たせして申し訳ありません。

それでは本編をどうぞ。

11話

「私ね、ポケモンバトルってあんまり好きじゃないんだ」

それは俺がイエローの家にやっかいになり始めたころから半月位した時に聞かされたことだ。

「えっとね、バトル自体は否定してないよ？　ポケモンと一緒に強くなって、ポケモンと一緒にバトルして、勝ったら一緒に喜んで負けたら一緒に悲しんでそれで努力して強くなって今度は勝って一緒になって喜ぶ、それはとても素晴らしいことだって思う」

だけど、そうイエローは続ける。

「私はねミオ、バトルして傷ついていくポケモンを見るととても辛いんだ。ほんとは傷つけあわないでみんなで仲良く一緒に笑い合っていられたら一番いいんだけど」

でも、世の中そうはいかない。

気性の荒いポケモンもいるし、そうでなくても縄張り意識が強いポケモンもいて一度その縄張りに入ろうものなら執拗に追いかけてくる。

縄張りを抜ければ追ってこない、そういうこともあるがそれはいい方で、最悪縄張りを抜けても追い続けてくることも度々ある。

それにことは野生のポケモンの話だけにとどまらず、普通に生活をしている中でもポケモンを使った悪質な犯罪行為だって頻繁に起こっている始末だ

それで命を落としたという例も決して少なくはない。
そんな時、傷つけたくないからと話し合って解決できればいいが、世の中のこと全てが話し合いで解決できるわけではない。
だからと言って相手の好きにさせていてはこちらがやられてしまうだけであり、自分もやられるわけにはいかないので反撃せざるを得ない。
攻撃することに戸惑ってしまえば自分がやられてしまうだけに留まらず最悪自分以外の人にも被害が及ぶこともあり得る。
まだまだ子供なイエローではあるが他の子よりもどこか聡いところがあり、バトルが好きではないといってはいるが、そういうところはきちんと理解はしているようだ。

「しょうがない、ことなんだろうけどね。それでも私はできる限りバトルはしたくないなって思う」

そういうイエローはどこか悲しげな表情をしていた。

俺たちは一番道路を抜けてトキワシティに到着していた。
幸いなことに行きで襲ってきたオニスズメの大群は帰りでは出くわすことがなく、2日ほどかけてゆっくりと歩きながらトキワシティに着くことができた。
それで、俺は一度家に帰って両親にポケモン図鑑をもらって帰ってきたことを報告しに行くかとイエローに聞くも、どうやらそのままトキワの森に行くようだ。

『それで、2番目に仲間にする奴って……まぁ、どいつかは予想はついてるけど、一応聞くけどあのいつも一緒にいたコラッタだよな？』

「あはは、やっぱりわかっちゃったよね。うん、私が一番最初に友達になった子なんだ。だからラッちゃんも一緒に旅ができたらいいなって思って」

そういいながら笑うイエロー。
よほどそのラッタ、ラッちゃんと会うのが楽しみなのだろう、歩くペースも若干上がってきた。
イエローはまだにこにこと笑っている。
そんなイエローを見ていて俺は和んでいく、しかし

（楽しそうなのはいいけど、わかってるのか？　一緒に旅をするってことは……）

トキワの森に行く道を楽しそうに歩くイエローに俺の心に一抹の不安が残った。

「ラッちゃん！」

『イエロー！　久しぶり！』

トキワの森に着くとイエローの気配に気づいたのかすぐさまラッちゃんが茂みから飛び出してきてイエローに飛びついた。

『ミオも久しぶり！　途中オニスズメに襲われたって聞いたけど大丈夫だった？』

『あぁ、まぁ、何とかな。それより帰りにオニスズメには会わなかったけどどうしたのか聞いてないか？』

『えっと、確か少し前に半分は森に戻ってきたって聞いたけど。あとはどこかに行ったんじゃないかな』

なるほど、どうやらもうすでに一番道路周辺の大群は無くなったようだ。

まぁ、その周辺に巣を作ってるような奴らもいるかもしれないから全部いなくなったってわけじゃないかもしれないけど、それでも俺達やサトシ達のように大群で襲われるようなことにはならないかな。

「それでねラッちゃん、私達これから少ししたら旅に出るんだけど、もしよかったらラッちゃんも一緒にどうかな？」

俺との会話も一端途切れたところで早速とイエローはラッちゃんに話す。

『僕も一緒に？』

「うん！」

『……うん、いいよ』

「ほんと!?　やった、やったねミオ!」

『……』

ラっちゃんの返答に一際嬉しそうにしているイエローだが、しかし俺は別の事に気が向いていた。

喜んでいる最中のイエローには気づかないかもしれないが、もしかしたらと思っていた俺には気づいていた。

ラっちゃんの雰囲気がさっきとは変わったこと。

タッ!

「あ」

ラっちゃんはイエローから距離をとる。

いきなりの事にイエローはどういうことか戸惑っている様子だ。

そんなイエローにラっちゃんは無情にも告げる。

『イエロー、僕を仲間に加えたいなら、僕とポケモンバトルして勝ってみせてよ』

「…え、えぇ!?」

やはりこうなったか。

野生のポケモンを仲間にするには基本的にポケモンバトルをして勝って力を示すことが条件だ。

中にはそのトレーナーの人格を認めて仲間になるというポケモンもいるにはいるがそれは稀だ。

しかし、イエローと仲のいいラッちゃんなら、イエローの人柄をよく知るラッちゃんなら別にバトルなんかしなくても一緒についてきてくれるのではないか、そうも思っていたのだが……。

「な、なんで!?　そ、そんなバトルなんてしなくたって!」

『そうだね、僕も最初はそれでもいいかなって思ってたんだけどね。君と一緒に過ごしてきた時間で君の事沢山知ることができたし、皆に優しい君が僕は大好きだから』

「だったら!」

『イエロー、君はとても優しい子だ。その優しさをすべてのものに注げる君はとても素晴らしいと思う。だけど…』

……そっか、ラッちゃんは心配なんだな。

イエローは優しい子だ、それはラッちゃんだけじゃない俺もそう思っているしこの森に住むイエローと触れ合ってきたポケモン達にもわかることだろう。

しかし、その優しさがいつかイエローを傷つけるのではないか、それをラッちゃんは心配しているのだ。

この世界を旅するということはここの森で出会ってきたポケモンよりも多くのポケモンと触れ合うことになるだろう。

しかし、その出会うポケモンの全てが全てイエローに好意的であるとは限らない。

ましてやポケモンを使って悪事をはたらく者もいるこの世の中、イエローのポケモンを傷つけたくないという想いによりイエロー自身が傷ついてしまう可能性は大いにあり得る。

いくら言葉を紡ごうとも、いくら触れ合おうとしても分かり合えない存在などこの世にはごまんといるのだ。

ラっちゃんはそんな奴らに大好きなイエローを傷つけさせたくないのだ。
だからこそ少しでも経験を積ませるためにイエローにバトルをさせる。
旅をするというからには最低限イエローは自分で戦えるようにならなくてはいけない、自分の身を守れるようにならなくてはいけない、俺達ポケモンを十分に使いこなして。
だから

ザッ

「ミオ！？」

俺はラっちゃんの想いを理解してイエローの前に出る、ラっちゃんとバトルをするために。

『やろうぜ、イエロー。旅をするからには野生のポケモンとバトルすることになるのは必至だ。話し合いだけで解決できればそれはそれでいいかもしれないけど、何でもかんでも話し合いで解決なんてできるわけない。それはお前だって解ってるだろ？』

「そ、それは、そうだけど」

そう、イエローだってそれくらいのことわかっているのだ、あのスピアーの一件のお蔭で。
どれだけ言葉を紡ごうとも取り合われることがなく、ただ一方的に襲われて死にかけたのだ。
あの時は確かにスピアーは混乱していたのかもしれないが、だからと言って今後の旅でそういうことがないなんて言いきれないのだ。
現に俺たちはオニスズメの大群に襲われたわけで、俺が攻撃した時

もイエローはいい顔はしなかったが止めはしなかった。
それは反撃しなければ自分たちがやられてしまうということがわかっていたからだろう。
そういった意味合いでは、あのスピアーに襲われた一件は貴重な体験をしたと言える出来事だったのではないだろうか。

『イエロー俺は、俺達は心配なんだよ。お前の誰にも傷ついてほしくないという想いはとても素晴らしいもんだ。そういう優しい想いに俺もラっちゃんも惹かれたんだと思う。だけど、その想いのせいでいつかイエロー自身が傷つくんじゃないかって俺たちは心配なんだ』

「……ミオ」

『俺達もイエローが傷つかないように一生懸命守る。だけど、俺達だけじゃ守りきれないんだ。イエローが一緒に戦ってくれないと守りきれないんだよ。だからイエロー、俺達と一緒に戦ってくれ！』

俺には漫画の主人公が言ってるようなかっこいいセリフなんて言えない。
こんな状況でいいセリフが思い浮かばないというのもそうなのだが、たとえ思い浮かんだとしても俺はそんなセリフを言うことはなかっただろう。
そんな大層なセリフを言えるほど経験もしてきていないし、仮に俺がそんなこと言ったとしても言葉に重みなんてあるわけがなく薄っぺらいだけで何も伝わらない。
だから俺にできるのは、今の俺の気持ちをラっちゃんの気持ちをそのままイエローに伝えることだけだ。

「……わかった、私も一緒に戦うよ。ミオ達が傷つくところは見た

くないけど、私のせいでミオ達を傷つけることなんてもっと嫌だから」

だから、そういいイエローは先ほどまでの弱々しく、迷いに包まれていた顔から一変させて前を、ラっちゃんの方を見据えて

「私も一緒に戦うよ」

もう一度、決意を表すようにそう言った。

『やっと、決心がついたようだね』

イエローの言葉を聞き、心なしか口の端をつり上げて薄らと笑っているようなラっちゃん。

イエローにやっとその気が起きてうれしいのだろう。

確かにラっちゃんがイエローが好きということに変わりはないが、野生のポケモンというのは基本的に好戦的なポケモンが多く、ラっちゃん自身も他の血の気の多いポケモンほどではないにしろ好戦的なところがある。

『さて、始めようか。イエローの初めてのポケモンバトルを！』

そういうと、ラっちゃんは体を低く落として臨戦態勢をとる。

『さぁイエロー、指示を頼む。これからはバトルの時はイエローの指示で動くから頑張ってくれ、俺もできるだけ合わせるようにするから』

「う、うん、一緒に頑張ろうね」

そう、これが正真正銘のイエローの初バトル。
オニスズメの大群の時は初心者なイエローに指示できるわけもなく俺が勝手に動いていたが、これからはそうはいかない。
イエローはトレーナー、俺はイエローの手持ち。
俺達の仲にあるのは主従関係ではなく友情だと断言できるが、だからと言ってイエローの指示を無視して俺の独断を通すわけにもいかない。

『……来ないのかな？　じゃぁ、先手はもらうよ！』

と、俺達が会話をしていた時、焦れたラっちゃんが体当たりで先制攻撃をしてくる。

『イエロー！』

「はぃ！？　え、えっと、避けてミオ！」

イエローの戸惑いながらも何とか出すことのできた指示に従い俺は体当たりを横に躱す。
結構ギリギリだったが、スピードは俺の方が上のようで何とか避けることがでｋ

バシバシッ！

『アデッ！？』

「ミオ！？」

ギリギリで避けたと思った矢先、俺の脇に大した威力ではないものの衝撃が襲い、吃驚した拍子に足を滑らせて転んでしまう。

いつまでも倒れているわけにいかず、すぐさま立ち上がり四足で立って低く構える。
相手を見てみると俺の方を見て薄らと笑いながら尻尾を振っているラっちゃんの姿。

（なるほど、“しっぽをふる”か。）

相手の防御力をダウンさせる技しっぽをふる、実際に防御力が下がっているかどうかなどわからないが尻尾の衝撃と転んだことによるダメージ以外にダメージはなく戦闘に問題はない。

（相手がコラッタだからという俺の不注意もあったかもしれないけど、それ以上にラっちゃんなんだか戦いなれてねぇか？）

まぁ、とにかく考えていてもしょうがない。

『俺は大丈夫だ！　続けて指示を出せ！』

「う、うん！　ミオ、電気ショック！」

それに従い電気ショックを放つ。
ほぼノータイムで放たれたそれほど威力はない電撃はまっすぐラっちゃんに向かい進み

サッ

当たる瞬間、ラっちゃんの動きが加速した。
ラっちゃんは紙一重で電気ショックを躱し、加速したままの動きで電撃の脇を通って俺に向かってぶつかってきた。

（これは、でんこうせっか！？）

電気ショックを使っていたために反応が一瞬遅れた俺は真正面からラっちゃんに衝突され背後にあった木に叩きつけられた。

『……ぐッ！』

叩きつけられた俺はそのままずり落ちて地面に倒れる。
しっぽをふるの防御力低下、でんこうせっかによる速攻、更に木に衝突した衝撃により俺の体はかなりボロボロになっていた。

（……強い）

純粋にそう思った。
最初の一撃は不注意による自業自得、次の二撃目は自身の経験の不足により反応ができなかったことによるもの。
オニスズメの時も相性が良かったということがあったとしてもあの大群相手に辛うじて撃退できたことで俺の中で自信になっていたものが全て崩れ去ってしまった。
二撃、たった二撃でわかってしまった、ラっちゃんは間違いなく強い。
そして戦闘経験も俺なんかと比べるのもおかしいくらいに豊富だ。

『これまでかい、ミオ？　だったら、ちょっと、がっかりだ、ね』

その声に俺は顔を上げる。
ラっちゃんは俺を見て心底残念そうな、期待外れだという表情をしていた。

『僕は、イエローと出会ってから、イエローを守りたいと、思った

時からずっと自分の力を高めてきた。イエローを守るために、傷つけ、させないために』

ラっちゃんは動かない、もう勝負はついたとでもいうのか尻を下ろして俺に語りかけてくる。

『でも、なんだい、君のその姿は？　君は今まで、何もしてこなかったと、いうのか？ピカチュウとコラッタという種族の差、性能の差といってもいいけど、それで、劣っている僕に、ここまでボロボロに、されるなんて』

ラっちゃんは知っているのだ、元々の種族としての力の差を。
しかし、それでもラっちゃんは自身を高め続けた。
努力によってポケモンはいくらでも強くなることができるということを知っているから。
だからこそ、ラっちゃんは憤りを感じていた。
種族として元の性能が優れているミオが自分にここまでボロボロにされることに、自分の大好きなイエローの一番のポケモンになったミオが自分に一撃も入れることもできず日に付してしまったことに。

『君じゃ、イエローは、守れ、無いな』

『ッ！？』

その言葉をきき、ミオは歯を食いしばる。
確かにラっちゃんの言っていることは正しだろう。
イエローを守ると決めてから自分を高めはじめて間もないとはいえ、戦闘において油断をし、その油断がもとで今地に付しているのだから。
これではイエローを守れないといわれても仕方がない。

……しかし

『…ッ…ぐぅぅ！！！』

『……まだ、立つんだね』

『あたり、まえだぁ！　諦めの悪さは、俺の自慢だからなぁ！』

力が入らなかった体に電気を迸らせ自身に活を入れる。
動く、まだ動く。
手も足もまだまだ動く。
電気もまだ半分も使ってはいない。
まだまだ戦える。

（でも、実際に戦って分かったけど、ラっちゃんは強い。スピードは俺の方が勝ってるけど、力は互角かもしれないけど、それを補って余りあるほどの経験がラっちゃんにはある。今のボロボロの俺でどうやって逆転するか）

考える、自分に今できることを頭に思い浮かべては否定し、思い浮かべては否定していく。
どうすればいいか、どうすればこいつに勝てるのか。
なかなか思い浮かべることができないその時、

「ミオ！　ラっちゃんは痺れてるよ！　今だったらさっきまでみたいに戦えないはず！」

イエローから声がかかった。
イエローの声に訝しみラっちゃんに目を向けよく見るようにすると、ラっちゃんの体が若干震えているのが見えた。

そういえば、さっきから彼が話している時度々詰まりながら話していたのを思い出す。
つまり、ラっちゃんは本当に痺れていた？
しかし、一体いつそんなことに……。

「ミオ！　でんこうせっかだよ！」

イエローの声にはっとする。
そうだ、今はそんなこと考えてる暇はない。
そんなことより今は目の前のバトルに集中しなくては。
俺はイエローの指示通りでんこうせっかを使う。
肉体のリミッターが外れ俺のスピードが加速される。
そのままラっちゃんに向かって突進していくが、どうやらラっちゃんもでんこうせっかを使って加速しているらしくギリギリで躱され背後から追撃してくる。
しかし、その動きに先ほどのキレはない。
俺はそれを横に跳んで躱し、すぐ横を通り過ぎていくラっちゃんの脇腹目がけてそのまま突撃をかました。

『うわぁ！！』

その勢いのままラっちゃんを地面を転がり木にぶつかり止まる。
そして

「ミオ！　今度こそ電気ショック！」

ノータイムで放出された電撃は最初と同じようにラっちゃんに向かって放たれる。
ただ最初と違うのは、ラっちゃんは痺れてダメージを受け怯んでいるということ。

放たれた電撃はラッちゃんに避ける動作をとらせる暇すら与えずに直撃した。

『イエロー、今だ！』

「う、うん！　やぁ！」

イエローは腰のベルトに装着されているモンスターボールを一つとりラッちゃんに目がけて放り投げる。
しかし、ボールを投げることに慣れていないイエローの投げたボールは大きく狙いを外れて高く空に飛んでいき

「あ」

『あ』

そのままゆっくりと落ちいてきたボールが木に当たって跳ね返り、ちょうどその落下地点に倒れていたラッちゃんに当たった。
すると、ボールから赤い光が伸びラッちゃんに当たりそのまま収納されてしまった。
何度かコロコロとボールが転がったところで止まり、それと同時にシュンという小さな音を立てる。

「……えっと、これって」

『まぁ、世間一般でいうところの捕獲（ゲット）ってやつだろうな』

「そっか……そっかぁ、私初めてポケモンを」

イエローはボールを拾い上げるとどこか感慨深げにボールを見つめ

る。
まぁ、確かに初めてバトルをし、初めてゲットをしたのだ。
バトルが好きではないというイエローであったとしても今回の事で満足感がいま彼女の中に満ち溢れていることだろう。

「……って、あぁ！　二人とも傷だらけだったんだ！　早く治療しなくちゃ！」

と、しばらくしたところでイエローが声を上げわたわたしながらも治療に取り掛かり始める。
ほんと、最後の最後で締まらないものだ。
そんなこんなといろいろありながら、イエローの初めてのバトルは無事幕を閉じたのだった。

11話（後書き）

ポケモンの世界ってすごいなぁ、大抵は努力で説明がつく世界。

コラッタでもロケット団を空の果てまでぶっ飛ばす力は驚異的。

ポケモンのでんこうせっか、こうそくいどうってどういう原理か考えていたら一番想像しやすかったのが某妹魂が使う神速だったのでそれを参考にしました。

実際にリミッター外すと体に負担がかかるらしいですが、まぁそこはポケモンボディと人間ボディの差。

そういうことで納得していただきたい。

次回もどうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0386q/

ポケモンになってしまった俺物語

2011年10月20日06時09分発行